

42155

教科書文庫

4
810
42-1919
200030
1958

Kodak Gray Scale



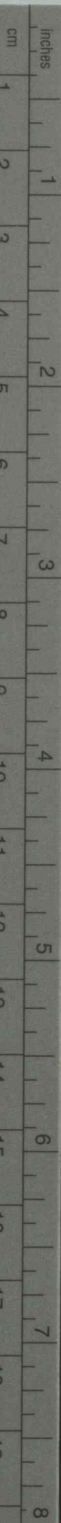
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Y619
資料室

訂正 女子國語讀本

秀



資料室
大正八年二月二十日
文部省
高等女子學校國語教科書
定本

375.9
Y019

痛大
書古
印

女子國語讀本卷四

吉田彌平 篠田利英 共編
小島政吉 岡田正美

東京



金港堂書籍株式会社

訂四 女子國語讀本卷四

目次

- 一 昭憲皇太后の御盛徳……文學博士 三上 參次……一
- 二 苦は樂の種……德川 光圀……六
- 三 日本人の忠君愛國(口語文)文學博士 芳賀 矢一……七
- 四 故郷……正岡 子規……一四
- 五 嫩草山(口語文)……德富健次郎……二一
- 六 紅葉の便を山里に問合す(候文)……文學博士 佐々木 信綱……二六

目次

一

◎柿(口語文)……………高嶋平三郎…二七

七 晚秋初冬……………德富健次郎…二九

八 第二回旅順港口閉塞……………三三

九 武士のなさけ(口語文)……………文學博士 三上 參次…三九

一〇 人間の三等……………福澤諭吉…四六

二 二宮尊徳の主義……………福住正兄…五二

三 金米糖の壺(口語文)……………柴田鳩翁…五八

一三 豊臣太閤の文事その一……………文學博士 三上 參次…六四

一四 豊臣太閤の文事その二……………文學博士 三上 參次…七一

◎曾呂利の頓才……………湯淺常山…七六

一五 茶僧利休……………堀 秀 成…八〇

一六 茶の湯と生花……………文學博士 坪内雄藏…八五

一七 植物と季節(口語文)……………理學博士 三 好 學…八九

一八 太平洋(新體詩)……………大和田建樹…九八

一九 極地の探検その一……………新保磐次…九九

二〇 極地の探検その二……………新保磐次…一〇七

二一 いろ／＼の花(短歌)……………一二四

二二 ナイヤガラ瀑布(口語文)……………文學博士 黑板勝美…一二六

二三 紐育その一(口語文)……………文學博士 黑板勝美…一二二

二四 紐育その二(口語文)……………澁川玄耳…一二七

二五 女中の周旋を頼まれし返事(候文)……………一三九

二六 朝鮮の民情……………文學博士 萩野由之 一四二

◎碁盤の散歩(口語文)……………文學博士 坪井正五郎 一五四

二七 鶯宿梅(新體詩)……………文學博士 藤岡作太郎 一五八

二八 根分の後の母子草その一……………瀧澤馬琴 一六一

二九 根分の後の母子草その二……………瀧澤馬琴 一六六

三〇 すみれ(俳句)……………一七一

三一 奉天の會戰その一……………新保磐次 一七二

三二 奉天の會戰その二……………新保磐次 一七九

訂四 女子國語讀本卷四目次終



訂四 女子國語讀本卷四

東京帝國大學
文學部教授
博士 國史家
編纂官 文學
科 博士

一 昭憲皇太后の御盛徳

三 上 參次

昭憲皇太后の聰明仁慈にわたらせ給ひし御事は、明治天皇乾剛の御徳のきはまりなかりしと共に、國民のひとしく仰ぎ奉れるところなれば、今更事々しく記し奉らんこと、なかく、に恐多きこと、ちすれど、こゝに聊か坤柔の御徳の一斑をかゝげて、世のなべて

の女性と諸共に、御美德の程をたゞへ奉らんとす。
 皇太后、夙に教育の事業に御心を注がせ給ひ、華族女
 學校を設けて華胄の女子の徳性涵養を圖り給ひ、ま
 た、しばく、同校に行啓遊ばされ、親しく教授の有様
 をみそなはし給ふ。東京女子高等師範學校に行啓
 遊ばされしこともまた一再に止らず。或は教育費
 として御内帑よりの御下賜金あり、或は學事獎勵の
 ありがたき御令旨を賜ひしなど、女子教育の隆盛を
 期せしめ給ひしこと、誠に畏ききはみになんありけ
 る。「金剛石も磨かざば」の御歌を誦し奉らんもの、誰

かは皇太后獎學の思召の深くおはせしことを感佩
 せざらん。



昭憲皇太后

皇太后、又、宮人と俱に蠶
 を養はせ給ひて、この國
 益多き産業を勧めさせ
 給ひ、或は御親ら赤十字
 社の事業を督し給ひ、尊
 き御身をも厭はせられず、親しく病院に臨ませられ
 て、病苦に惱めるものを慰藉し給ひき。
 しかのみならず、戦争の起りし毎に、出征將士の上を

思しやり給ふ事深く、繙帶の御製作に、傷病兵の御慰問に、日夜御心身を勞せさせ給ふ御事、かしこしともかしこきに、我が將士は固より言ふに及ばず、捕虜となれる敵國の將士にさへ、義手義足の御下賜ありけるなど承るに至りては、至仁至慈、海の如く山の如き御徳に感激し奉らざるものなかりき。

皇太后は文學の御たしなみ深くわたらせ給ひて、折にふれさせられたる御歌など、誠にめでたくうるはしくて、斯道の博士達も常に驚嘆し奉りきと承る。

殊に畏しと見奉るは、萬づに御心を用ひさせ給ふこ

仁徳天皇の皇女
雄略天皇の皇后
藤原冬嗣の女
順子、仁明天皇の皇后
嵯峨天皇の皇后
橘嘉智子
嵯峨天皇の皇女
正子、淳和天皇の皇后

と深く、内外に對せさせ給ひての御もてなしなと、常にうるはしくわたらせ給ひき。内助の御績に至りては、また奉るべき感嘆の言の葉もなきほどなりきとなん傳へ承る。

實に皇太后はたぐひ稀なる御美德を備へさせ給ひき。

今こゝに記し奉れるは、もとよりそのかたはしに過ぎざるものから、幡梭皇后の蠶を養ひ給へる、承和の藤皇后の母儀の則となり給へる、さては、檀林皇后の學館院(四)天長の王皇后の濟治院の事など、歴史に見え

たる代々の椒房のよき事のみ多く聯想せらるゝは如何に。あゝ、皇太后は常に婦女子の爲に尊き儀範を垂れさせ給ひ、ありがたき光明を示させ給ひき。我が帝國の婦人たるもの、いかで大御心の程を體し奉り、身を修め、家を齊へ、いやましにこの國を榮えしめんの覺悟なくして可ならんや。(家政講義の序)

*水戸徳川家第二
代藩主、元祿二
三年歿す。

二 苦は樂の種 徳川 光圀
苦は樂の種、樂は苦の種と知るべし。恩を忘るゝ事なかれ。子ほどに親をおもへ。掟におぢよ。火に

*東京帝國大學文
科大學教授、國文學
者

おぢよ。分別なきものにおぢよ。朝寢すべからず。分別は堪忍なり。小なることは分別せよ。大なることは驚くべからず。九分は足り、十分はこぼると知るべし。

三 日本人の忠君愛國 芳賀 矢一

余がドイツ留學中、或年の天長節の祝宴に、日本の近世史に關係あり日本の勳章を帯びて居る男爵ジールト氏の演説を聽いて、その中の一節に感じた事がある。同氏の言は「西洋諸國の革命は國王に對す

る不満から起つて、その結果は、いつも王室が權威を縮小せられ、或は、全く顛覆せられるものであるが、日本ののはこれに反して、政變毎に皇室の稜威が益し繁榮が増進する。」といふ意味であつた。これは、如何にもよくわが國體の萬國にことなつてゐることを言明したものといはねばならぬ。

かの大化改新といひ明治維新といふ政治上の二大變動は、わが國なればこそ極めて容易に成就して、雨降つて地かたまるといふ結果が得られたのである。新しい文化に接して、これを採用する必要の生じた

時、制度改正の詔敕が一度煥發すれば、祖先以來の領土領民もさし出し、既得將來の權も悉く打棄て、唯唯諾々として大命を承るといふことは、決して外國人にはあり得べからざる事實である。これであればこそ、わが國民は萬世一系といふ國體を維持し、時代の進歩に伴つて進歩したのである。かういふ場合には、外國ならば、必ず國王と人民との間に衝突が起る。一旦人民と衝突すれば、國王は散々な目に逢はせられる。その例は枚擧に暇が無い。外國へ出奔する位は愚なこと、遂には刑場にひき出され、斷頭

臺上の露と消えるといふ有様。英國・佛國の歴史などは、日本人の目からは、殆ど信ぜられぬ沙汰であつて、小學から中學にはひつて始めて外國の歴史を學ぶものは何人も必ず外國史に慘酷無道の事の多いのに驚くに相違ない。

元來、革命といふ語は「天之命革、而四時成」といふ語から出たので、支那人は昔から天子は天の命を受けて百姓を治めるものだといふ思想を根本として居る。それ故、聖人賢者たる以上は、誰が代つて天子になつても構はぬのである。是が爲に、支那では夏殷周以

*夏、殷、周、東
漢、秦、漢、後
東晉、宋、齊、梁、陳、隋、唐、後唐、後梁、後漢、後周、後宋、後周、後元、明、清、中華、民國

後既に二十有餘度も朝が更つてゐる。その時には、天の命が革つたものと覺悟して、平氣で新しい天子を戴いてゐる。かういふ國には、決して大化の改新や明治の維新のやうな改革が行はれることはない。イギリスの貴族は今でも大きな領地をもつて居る、ドイツの國でもさうである。日本國民の皇室に對する考は古今東西全く類例が無いのである。西洋諸國の帝王も支那の天子も國民の間から起つて、或は權力を以て、或は輿望によりて、遂に帝王の位を得たのである。素性を洗ひ祖先を正せば、もとは

神武天皇より後
小松天皇までの
歴史、徳川光圀
の綱纂、三百九
十七卷あり。
藤原信頼と結ん
で、平治の亂を起
し、遂に敗死す。
元暦元年、範頼、義
經の兵と近江栗
津原に戦つて、戦
死す。

同等の國民である。これが諸外國民の王室に對す
る考であらう。日本人は皇室をばわれく國民と
は一種別なものと見て居る。支那には王侯將相寧
有種ラシヤといふ語があるが、日本人は帝王といふ位は國
民の決して覬覦すべきものでないと、誰も教へはし
ないが、祖先以來さう考へて居る。長い歴史の中に
は、皇家に弓を引いた者も無いではないが、天子の位
をねらふやうな考は決して無い。大日本史には源
義朝や源義仲が叛臣傳に入れてあるが、これは天子
に向つて敵對した事の大義名分を正したので、此等

天安朝の亂を起す
平安朝中頃の事
奈良朝天平時代
の僧孝謙天皇
の寵を得たり。

の人は別に深い考のあつた謀叛人ではない。いつ
れも皇室の寵を失つた悔しまぎれに手向ひした亂
暴人に過ぎぬ。多くは、朝廷の或官位を得たいと思
ひながら、それが得られぬ爲に、騒動を起して、我儘を
通さうといふ輩で、叛臣と雖も朝廷の尊さを忘れぬ
ものである。平將門も檢非違使になれなかつた爲
に謀叛したのである。唯一人弓削道鏡といふ坊主
が佛法主法を一つにして、自分がその位に坐らうと
いふ不届な了簡を起したが、忠誠な臣民の聲は八幡
の神託となつて、忽ちこれを排斥した。その外には、

藤原道長の詠

一人も無い。藤原氏が廢立を行つたといつても、自分の女の生んだ皇子を皇位に即けたいといふ慾望からした事で、これが即ち人間としての最大慾望であつた。その慾望さへ達すれば、
この世をばわが世とぞおもふ。望月の
かけたることもなしとおもへば、
といつて、大満足をしてゐたのである。(國民性十論)

四 故郷

正岡子規

世に故郷ほどこひしきものはあらじ。花にも、月に

名は常規、伊豫松山の産、新派俳句の創始者、明治三十五年歿す。

も、喜にも、悲にも、まづ思ひ出でらるゝは故郷なり。故郷は學問を究め見聞を廣くする地にあらず。されど、故郷には歸りたし。故郷は事業を起し富貴を得る地にあらず。されど、故郷には住みたし。兩親姉妹あるが爲に故郷に歸りたしと思ふもあらん。我は親はらからとも今は故郷にあらねど、猶故郷こそこひしけれ。都にありて世を厭ふが爲に故郷に住みたしと思ふもあらん。我はさまでに世を厭ふふしもなく、猶故郷こそこひしけれ。想へば、十餘年の昔、はやり氣の抑へ難くて、單身故郷を出でんと

こそは勇みしか。いざ首途といふ際に、一點の熱涙の覺えず頬のあたりに流れ來れるを見送りの人に見せじと顔をむけたる時の苦しさ、何やら胸につかへたる心地なりき。母親の乳房と故郷の土とは離れりきものなり。

故郷近くなれば、城の天主閣こそ先づ目を悦ばする種なれ。低き家、狭き町、淋しき松繩手、丈高き稻の穂、鼻の尖に並びたる連山、をさなき頃より見馴れたる一軒家、見るもの皆莞爾として我を迎ふるが如く、いづれなつかしからぬはなし。まづ身よりの家をこ

こかしこと訪れて、久闊の情をのぶれば、年老いたる婆様、瘦せたる叔父御、肥えたる叔母御、よく居眠する下女の顔さへ、見覺えたるまゝに少しも變らず。さて變らぬは故郷よと思ふも、歸り着きし瞬間なり。變らぬはめでたけれど、全く變らでは何の面白き事かあらん。變らずと見るうちに、聊かながらかれもこれも變り行きたるこそ、なかくに聞きて、見て、ゆかしけれ。人の上につきて第一變りたるは、わが從弟妹のいたくも成長したることなり。「都の人こそ來たまへれ。われも其の顔見ん。」などひしめきあひ、

わが前に跪きて禮を述ぶるもあれば、襖の隙よりは
づかしげに窺ふもあり。幼きは、はじめて見たる顔
もあり。さらぬも、おもかげばかりはもとのまゝに
て、振分髪の子に變りたるも少なからず。曾て見
し時には、小學讀本を高らかに讀上げて誇らしげに
人に聞かせたる男の子の、今ははや海陸軍を談じ、外
國の形勢を説く程になりたるもあり。唐黍の穀な
どもて拵へたる雛を箱の上に並べ、まゝ事に餘念な
かりし女の子の、嫁入すべきほどになりて、わが膝の
もとに茶を汲みて置きながら、顔もえあげて退きた

るなど思へば、彼方よりは我をもしかく年とりたり
と見るらんと、獨り心に恥づること多かり。
戸の外に出づれば、何縣士族寄留といかめしく標札
うちたる家どもの、大方は聞知らぬ人の名を示して、
中にも陸軍出仕の人々多く見受けらる。小さき時
より馴染なりし本屋は昔の様ながら、見知らぬ丁稚
は我を十年前の華客とも知らで、外々しくもてなし
たるも、本意なく覺ゆ。豫て知りたる道具屋は引越
しゝか、潰れしか、あらぬ店となりて、淋しかりし武家
町の角に料理屋の軒を並べたるも、あいなしや。

いで、菩提所に詣でて、久しぶりに檣しきみにても手向けんと辿りゆけば、山門半ば崩れて、一條の汽車道は其の傍を横ぎれり。あなやと驚きて、少しく左に曲れば、數百の墓累々として、未だ荒れはてぬとにはあらねど、彼の鐵道に隔てられ、父君などの墓の後は、一歩ならぬに、粟・黍など秀でたり。一目見るより覺えず目をしばたゝきぬ。

粟の穂のこゝを叩くな、此の墓を。

嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。 (子規隨筆)

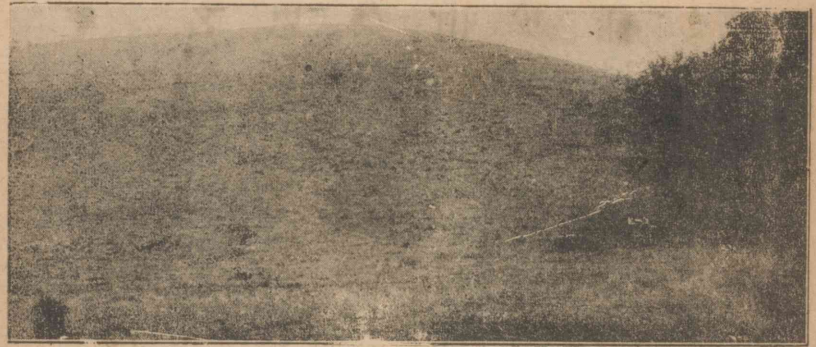
(二)春日山の北尾の
一山嶺なり。手
向山ともいふ。
(三)芝生の山なり。
著述家、曾て
花と號せり。

(三)この宿屋今なし

五 嫩草山

徳富健次郎

名を聞いてさへ優にやさしい嫩草山は、見て美しく、思うてなつかしい山である。八年前の十一月、初て奈良に來た夕、三景樓の二階から、紺青にけぶる春日山につゞいて、貂の皮で包んだ様に暖い色の、ふつくりとした嫩草山の美しい姿を見た時、余の心は如何様に躍つたであらう。丁度詠へたやうに、十五夜のまま圓な月が其の上に出て居た。併し、其の時は遠しい旅で、山に上ることも果さなかつた。今初て其



嫩草山

の懐ひを迎るのである。霜枯初めた矮い薄や刈萱や他の枯草などの中を人の踏みならした路が幾條か、麓から頂へ通うて居る。余等は其の一つを傳うて上つた。打見たよりも山は高く、思うたよりも路は急に、靴の足は滑りがちで、約十五分を費して上り果てた時は、額も背も汗ばんで居た。頂はやゝ平坦になつて、麓

河内國南河内郡



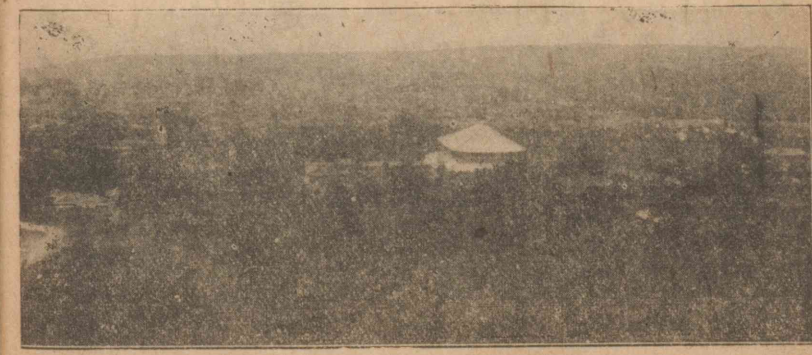
の景

からは見えなかつた頂が、まだ二重になつて、後に控へて居る。唯一つある茶店は最早店をしまひかけて、頂には遊客が一人もなかつた。余等は額の汗を拭つて、嫩草山の頂から大和の國の國見をしようとして、眼を放つた。夕方である。日はすでに河内の金剛山と思ふあたりに沈んで、一

大和國生駒郡
大和國生駒郡
多武峰ともいふ
大和國磯城郡
談山神社あり
泊瀬山ともいふ
大和國磯城郡初
瀬村

大和國高市郡
傍山の東北
大和國生駒郡法
隆寺村に在り
推古帝十五年建
立

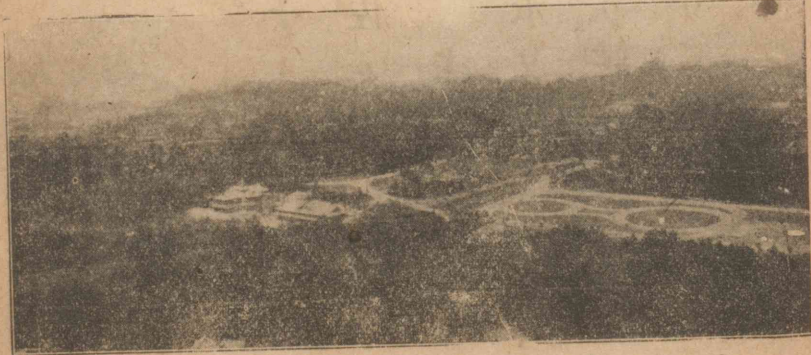
抹殷紅色の殘照が西南の空を染めて居る。西、生駒、信貴、金剛山、南、吉野から、東、塔の峯、初瀬の山々は、大和平原をぐるりと圍んで、蒼々と暮れつゝある。此の暮山の屏風に包まれた大和の國原には、夕煙立つ紫の村、黄ばんだ田、明るい川の流、神武陵、法隆寺、千年二千年の昔あつたもの、今生きてゐるものの總てが、夜の安息に入る前に



奈良市

*春日山の西麓二十餘町を占む

日に名殘を惜しんで居る。足の下で、奈良の町の火が美しくつき出した。蜂の群のつぶやきの様な人聲、物音が響く。ぼうん。麓の方で、晚鐘が鳴り出した。其の鐘の音に促されるかのやうに、鴉が啞々と鳴いて、山の暮から野の黄昏へと飛んで行く。余等は今一度眼を平原に放つた。最早、日の名殘も消えて、眼に入る



の全景

一切のものは、蒼い靄に包まれた。大和は今暮れるのである。(みゝずのたはごと)

六 紅葉の便を山里に問合す

佐々木信綱

思はぬ御無沙汰いたしをり候。去年の暮御出の折の御物語にて御地の様子承り候うてより、是非一度御尋ね申したく存居り候ひしに、春の頃は必ずと思ひ立ちつゝ障ありて果さず、いつしか秋風身にしむ今日と相成り候。さて、そ

歌學者、歌人、
*竹柏園と號す。
東京帝國大學
東大講義師、
學科大學、
博士、
文、
文

東洋大學教授、
心理學者、
名は至時、東岡
と號す。曆官と
なり、寬政曆を
作る。文化元年
歿す。
高橋作左衛門
家、時代の天文
政十一年歿す。

の折御あたりは紅葉いとよろしと承り及び候ひしが、見頃は何日頃にて候はん、御知らせたまはりたく願上げ候。この品々この頃東京にてはやり候ものに候まゝ、御娘君たちに差上げ候まづは御伺ひまで。時節柄御厭あらまほしく候。かしこ。(文のしをり)

◎ 柿

高島平三郎

高橋作左衛門は、大阪定番の同心を勤めて居た頃麻田剛立に就いて天文曆學を學んで居た。自宅に大きな柿の

樹があつて、秋毎に枝も撓む程に實を結んだ。作左衛門は近所の子供が盗み取らぬやうにと、夜なく見廻つて屢、夜を更すことがあつた。或日、作左衛門役所から歸つて來ると、いつもの柿の樹が見えぬ。怪しんで内に這入つて見ると、根本から伐倒してあつた。大に驚いて、妻にどうした譯かと問うた處、妻は靜かに答へて、

貴方は、秋になると、いつも此の樹に心をお奪はれになつて、學問に身をお入れにならぬ。私は此の樹が恨めしくて、御相談も致さずに斯くは取計ひました。

と言つた。作左衛門は大に悔悟し、それより心を勵まして天文觀測の事に勉め、遂に斯の學の大家となつた。(逸話の泉)

七 晩秋初冬

徳富 健次郎

(一)

霜落ち木枯吹初めてより、庭の紅葉、門の銀杏、しきりに飛び、晝は書窓を掃ふ影、鳥かと疑はれ、夜は軒を撲ちて晴夜に雨を想ふ。朝に起きて、見れば、滿庭皆落葉。眼をあぐれば、さても瘖せたり、楓の梢。錦は地に散布きて、梢には昨夜の風に残されし二葉三葉、四葉心細げに朝日に光り、昨日まで黄金の雲と見えし銀杏も、今朝は膚薄う骨あらはれ、晩春の黄蝶にも

似たる殘葉の猶此處其處に縋りつきたるもあはれなり。

(二)

この頃の晝こそいと静かなれ。朝は霜夕は風の流石に寒けれど、晝は空青々と高く澄みて、日光清く、美し。窓に對して書讀み居れば、都に住むとしも思はれぬばかり静かなるに、時たま障子にうつる物の影、何ぞと障子開けば、庭の李樹の葉は落ちて、槎枒たる枝の縦横に青空をはさみたるに、梧葉にや、大きな枯葉の一つ落ちかゝり、猶落ちもやらで静かに日光

に光りたるも、をかし。

庭も寂びぬ。霜枯の菊俯きて影を落し、鳥の啄み残せる南天の實の金剛纂の下に紅う照れるも、華やかならずしていと寂びたり。雀三羽庭に下りて餌をあさる。縁には老猫の日を浴びて眠りぬ。蠅一つ飛來りて、障子を這ひあるく音、かさ／＼と聞ゆ。

(三)

月色ほのかなる夜に、ほの白き銀杏の落葉を踏みて庭に立てば、月一しきり薄れて、はらくと木の間洩り來る二點三點。時雨——と思へば已に止みて、また

月になり行く。此の趣誰にか語らむ。月なくて寒星空に満つる頃、木の下に寂然として佇めば、夜氣凝りて動かず。良久しうして大氣少しくふるひ、頭上に枯梢の相觸るゝ音あり、足下に落葉のがさりと云ふ響あり。一瞬にして止む。星の語るにあらざや。月、霜の如く地に冴え、風、海の如く空に吼ゆる夜は、人籟すべて絶えて、直ちに至上の聲を聞く心地す。

(自然と人生)

*明治三十七年三月

八 第二回旅順港口閉塞

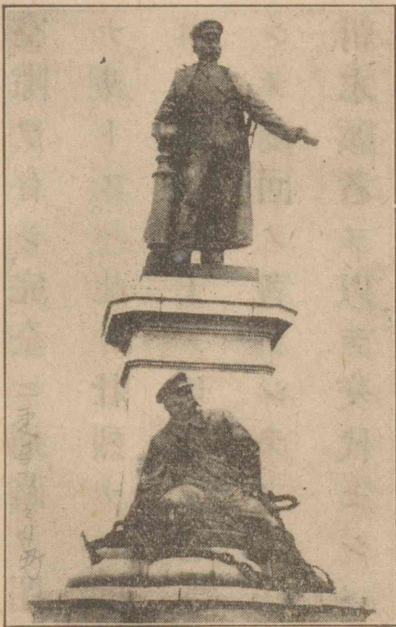
聯合艦隊ハ去^{*}二十六日再ビ旅順ニ向ヒ、同二十七日午前三時三十分敵港閉塞ヲ決行セリ。四隻ノ閉塞隊ハ驅逐隊及ビ水雷艇隊掩護ノ下ニ旅順口港外ニ達シ、敵ノ探海燈ノ照射ヲ冒シテ港口ニ直進シ、約二海里ニ達スル頃敵ノ發見スル所トナリ、兩岸ノ要塞及ビ哨艇ヨリ猛烈ナル砲火ヲ受ケシモ、之ニ屈セズ、四隻相次イデ港口水道ニ闖入シ、第一ノ千代丸ハ黃金山ノ西側ニ於テ海岸ヨリ約半鏈ノ所ニ投錨、爆沈

シ、第二ノ福井丸ハ千代丸ノ左側ヲ過ギテ少シク前方ニ進ミ投錨セントスル時、敵驅逐艦ヨリノ魚形水雷一發命中シ、次イデ其ノ位置ニ爆發、沈没シ、第三ノ彌彦丸モ福井丸ノ左側ニ出デ投錨、爆沈セリ。第四ノ米山丸ハ稍後レテ港口ニ達シ、敵ノ一驅逐艦ノ船尾ニ衝突シナガラ、既ニ沈没セル千代丸ト福井丸トノ間ヲ通過シ、水道ノ中央ニ投錨セシ時、敵ノ魚形水雷一發ヲ受ケ爆發シ、惰力ノ爲左岸ニ近ク船首ヲ左ニシテ横ニ沈没セリ。敵ノ猛烈ナル砲火ノ下ニ於テ、斯クノ如ク閉塞船ガ勇敢沈着、其ノ任務ヲ遂行シ

*明治元年豊後に
生る。

タルハ、事業トシテ間然スル所ナク、誠ニ賞讃スルニ餘アリ。唯遺憾ナルハ彌彦丸ト米山丸トノ間ニ尙空隙ヲ存シ、完全ニ通路ヲ閉塞スルヲ得ザリシ一事ナリトス。此ノ壯烈ナル閉塞ノ再舉ハ、前回之ニ従事シタル勇士ノ切願ヲ容レ、將校及ビ機關士ハ主トシテ前回ノ者ヲシテ之ニ任ゼシメ、下士以下ノミハ新志願者ヲ以テ交代セシメタリ。
閉塞隊員中戰死者中佐廣瀬武夫、兵曹長杉野孫七、外下士卒二名、重傷中尉島田初藏、輕傷大尉正木義太、大機關士栗田富太郎、外下士卒六名ニシテ、其ノ他ハ悉

ク無事我が水雷艇隊驅逐隊ニ收容サレタリ。戰死者中福井丸ノ廣瀬中佐及び杉野兵曹長ノ最後ハ頗ル壯烈ニシテ、同船ノ投錨セントスルヤ、杉野兵曹長ハ爆發藥ニ點火スル爲船艙ニ下リシガ、敵ノ魚形水雷命中シタルヲ以テ、遂ニ戰死セルモノ、如ク、廣瀬中佐ハ乗員ヲ端舟ニ乗移ラシメ、杉野兵曹長ノ見當ラザル爲、自ラ三度船内ヲ搜索シタルモ、船體次第ニ沈



廣瀬中佐銅像

没シ、海水上甲板ニ達セルヲ以テ、止ムヲ得ズ端舟ニ下リ、本船ヲ離レ、敵彈ノ下ヲ退却セルガ、其ノ際、一巨彈中佐ノ頭部ヲ撃チ、中佐ノ體ハ一片ノ肉塊ヲ艇内ニ殘シテ海中ニ墜落シタルナリ。中佐ハ平時ニ於テモ常ニ軍人ノ龜鑑タルノミナラズ、其ノ最期ニ於テモ萬世不滅ノ好鑑ヲ殘セルモノト謂ツベシ。閉塞隊員ノ掩護收容ニ就イテハ、直接其ノ任ニ當リシ水雷艇隊最モ力ヲ盡シ、天明過グル迄敵ノ砲火ニ曝サレツ、其ノ任務ヲ遂行セリ。就中、蒼鷹燕ノ二艇ハ閉塞船隊ヲ護衛シテ港口ヨリ約一海里ニ達シ、

敵ノ驅逐艦一隻ト會戰シ、多大ノ損害ヲ加ヘ、敵ハ汽
 罐ヲ破裂サレタルモノ、如ク、盛ンニ蒸氣ヲ吹カシ
 ツ、退却セリ。閉塞隊ノ端舟ノ港外ニ退却スル時
 目撃スル所ニ依レバ、敵艦ト認ムベキモノ、黃金山下
 ニ於テ全ク進退自由ヲ失ヒタルモノ、如クナリシ
 ト云フ。

我が水雷艇隊驅逐隊ハ、天明過グル迄熾ナル敵ノ砲
 火ヲ蒙リシニ拘ラズ、寸毫モ損害ナシ。閉塞隊員ノ
 收容ハ、千代丸及ビ彌彦丸ノ乗員ハ燕ニ、米山丸乗員
 ハ端舟三隻ニ分乗シテ、鵠雁ニ收容サレ、福井丸ノ乗

員ハ霞ニ收容サレタリ。(公報)

九 武士のなさけ 三 上 參 次

三十七八年戰役に露國の水師提督マカロフが戰死
 した時、我が日本の新聞は筆を揃へて弔辭を書いた。
 之を見て、或外國人は小聲で、「これは西洋との戰爭で
 あるから、日本は大いに努めて人氣取をして居るの
 であらう。」と言つた。又、日本で、露國の捕虜が、あの様
 子を見たならば、露國の兵士は皆喜んで日本の捕虜
 になるであらうとまでいはれるほどに、優遇されて

*露國海軍中將
 マカロフが水雷
 艇に沈没
 せる際溺死す

名は輝虎、戰國時代の英雄、越後を領す、天正六年三月歿す。
 名は晴信、戰國時代の英雄、甲斐を領す、天正元年歿す。
 天正元年より天正十六年まで二十七年間。
 今川義元
 北條氏康

居るのを見て、これも、ある西洋人が「日本は西洋諸國への御附合にあのやうな事をしてをるのだ」と話合つたさうであるが、これは甚だしい誤である。敵をいたはるといふことは、他國にもあらうが、我が日本に於ては、實に古來普通の事、決して今日始つたことではないのである。極めて手近な一例を言へば、上杉謙信と武田信玄とは永い間の敵であつたが、山國の主の信玄が、今川北條二氏の同盟によつて、鹽の輸送を絶たれて頗る苦しんだ時、謙信は年來の敵でありながら、信玄の方へ

天正元年四月

信玄の子、天正十年信長に亡ぼさる。
 甲斐國東山梨郡木賊村に在り。
 慶長五年九月、家康の重臣、慶長五年伏見城に戦死す。

自分の領地から鹽を贈つてやつた。是が即ち敵を憐んで救つた先例の一つである。又、其の信玄が死んだといふ通知を得た時、謙信は食事をしてゐたが、箸をおいて「あ、此の好敵手を失つた」と嘆いた。これが即ちマカロフが戦死した時、我等が之を弔つたのと同様である。徳川家康が織田信長と協力して、武田勝頼を天目山に攻滅し、彼が首を取つて來た時、家康は床几を離れて、恭しく其の首に禮をしたといふことである。また、關原の役の初に、鳥居彦右衛門元忠が家康の命に

*大阪軍

よつて伏見の城へ籠つたが、敵の大軍に攻められて落城に及んだ時、寄手*の兵士雜賀孫市といふ者城中へ討入つて、元忠の處へ來た。其の時、元忠は老將のこととて、殆ど弱りきつて、鎗を杖にして石段に腰を掛けて居つたが、孫市を見て「我は大將の鳥居彦右衛門元忠である。其の方、我が首を討つて功名手柄いたせ。」と言ふと、孫市は驚いて後へ退り、「御大將の名は豫て承つて居りましたが、御目にかゝるのは今日初めて、御座りまする。あなたの如き御身分の方を手前風情の者が手にかけることは出来ません。ど

うぞ御最後をなされませ。御首級は手前が頂戴して手柄にいたしませう。」と言つたので、元忠も「尤だ。」と言つて、直に皺腹を搔切つて、首を孫市に授けたといふことである。武士道の禮儀を重んずることは、實にかういふ工合であつたのである。

これは、又、正平二年の十一月、攝津住吉の戦の時のことである。楠木正行は敵將山名時氏の兵を追ひかけたが、丁度渡部橋の處で、敵は橋から墜ちて、溺れる者が多かつた。正行はそれを援けて、いたはつて、歸してやつた。*太平記には「秋の霜肉を破り、曉の氷肌

*南北朝時代の軍記物語。

に結びて、生くべしとも見えざりけるを、正行は小袖を脱ぎかへさせて身を温め、藥を施して創を療せしめ、又、馬を引き物具を與へて、禮して送り還した趣を記してをる。斯ることこそ我等の祖先の心がけてある。然るに、今日西洋各國が見て居るからお世辭のためにしたとか、西洋を真似たとかいふことは、たとひ僅か一人が言つても、又、小聲で言つても、我々日本國民をば甚だ侮辱した語である。雷にこれのみならず、我々の祖先は彼等西洋人よりはずつと優つた事をとりの昔にして居るのである。

*金剛峰寺

紀州の高野山＊に行くとき、寺院の澤山ある邊から奥の院まで行く間に、十八町許、兩側に樹木の蒼鬱と茂つて居る間に、石塔が無數に並んでをつて、恰も倫敦の



ウエストミン
スターアッベ
ーの内部の、し
かも、その大仕

掛なやうな處がある。そこの、入口から約三分一ほど往つた處の左手に、大きな石塔が一つ目立つて立つてをる。それは朝鮮征伐の時に命を落した敵味

方の軍兵の冥福を祈るがために、島津家で建てたものである。我々の祖先は既に三百年の昔にかういふ立派な事をして居るのである。是を見ても尙彼等は西洋を真似た偽善だと日本人を誣ふるであらうか。

(國史より觀たる旅順の開城)

*明治の先覺者、
す。明治三十四年歿

一〇 人間の三等

福澤諭吉

智愚強弱は様々にして、上智と下愚と、至強と至弱とを比較すれば、同じ人類とは思はれざる程の相違あれども、社會の經濟上より見るときは、概して之を三

等に分つ可し。不具・癡疾の者は天然の不幸として之を除き、生來屈竟の身體にてありながら、何等の才能もなく、唯安閑として飲食し、甚だしきは放蕩無賴、



福澤諭吉

常に他人の厄介となるのみか、動もすれば、他を害して自分の慾を逞しうせんとする者あり。

此等は最下等の人にして、社會全體の爲に謀れば、此の種類の者は有害無益、俗に云ふ娑婆ふさぎの邪魔

者なれば、一人にても其の數の減ずるこそめてたけれ。

一段を上りて、さまで人の世話にもならず、父母兄弟と共に衣食するのみにて、曾て戸外の事に關せず、間接にも直接にも人に教へたることなく、又、相談に與りたることなく、一年に得たるものは一年に衣食し盡して、老後、死後の謀を爲すに違あらず、一軒の家を天地として生れて死するのみ。此の種類の人は、一國の良民として決して邪魔者には非ざれども、社會人事の盛衰には關係薄くして、此の世にありて大に

益するに非ず、無くて大に不自由を覺ゆるに非ず、先以て中の種族なり。

それより更に上りて、教育の結果、又は、天賦の才力を以て活潑に立働き、一身一家の獨立既に成りて、世間の累を爲さざる上に、尙一步を進めて、他人の相談相手と爲り、又、社會の利害を案じ、自ら自身の地位、才力を顧みて、能く事に當る可きを信じて、或は私に商賣工業を企て、或は公に政治上に關係し、或は地方の民利を謀り、或は宗教、教育の先導者となる等、一身の働を二分して、一は以て家に居り、一は以て世に處し、公

私兩様のために力を盡す者、これを最上等とす。以上、三種三等の區別は、必ずしも其の人の貧富貴賤のみによらず、時に或は富貴にして厄介なる者あり、貧賤にして調法なる人物あり。その子細を審かにして筆に記すは難き事なれども、事實は明白にして、世人の常に知る所なり。例へば、一町村一郡一縣に人の死亡することあらんに、之を傳聞して其の不幸を悲しむは人情の常なれども、之を悲しむと同時に、又竊かに私語して、何某の病死、誠に氣の毒なれども、實は地方遠近の爲に好き厄介拂なり。彼の親類身

寄にても先々安心ならん。など云はるゝ者は、下等なり。病死の報知に接して會葬はしたれども、不幸の沙汰は其の日限りにして、翌日より語る者もなきは、中等の人物なり。死亡の新聞に驚くは勿論、病中より様々の噂に心配する折柄、いよく不幸を聞きて、其の地の人々まづ之を悲しみ、次で之を惜み、此の人に去られては云々」とて泣く者あり、狼狽する者あり、數年の久しき、尙人の口の端に残りて消滅せざる者は、上等なり。

されば、今、人が偶然にも此の世に生れ出で、其の一

身の行狀より、居家處世の法に至るまでも、上等にするか、中等にするか、はた、下等に陥るか、其の上中下の差別は、必ずしも學者先生に質問するを要せず、近く其の地の人心の向背を觀察して、之を知るべし。社會は良師なりといふは、即ちこの事なるべし。

(福翁百話)

*二宮尊徳の高弟
箱根湯本の人。

二 二宮尊徳の主義

福住正兄

川久保民次郎といふものあり、二宮翁の親戚なれども、貧にして翁の僕たり。國に歸らんとして、暇を乞

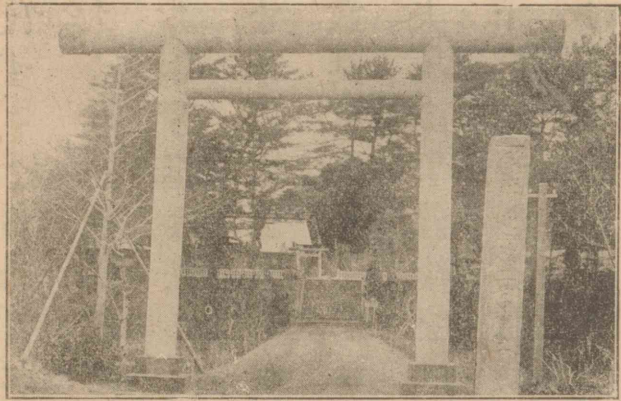
ふ。翁曰く、「夫、空腹なる時、他にゆきて、一飯をたまはれ。予庭をはかん。」と云ふとも、決して一飯を振舞ふ者あるべからず。空腹をこらへて、まづ庭を掃かば、



二宮尊徳

或は一飯にありつく事あるべし。是己を捨て、人に随ふ道にして、百事窮しても又通ずべき道なり。我若年初めて家を持ちし時、一枚の鍬損じたり。隣家に行きて鍬をかし給はれといひしに、鄰翁曰く、「今此の畑を耕し菜を蒔かんとする所なり。蒔き終らざれば貸し難し。」といへり。「我家

に歸りても別に爲すべき業なし。依りて、此の畑を耕して進ずべし。』と云ひて、耕し、菜の種を出されよ。序に蒔きて進ぜん。』と云ひて、蒔きしに、隣翁喜びて鋤を貸し、尙曰く、『鋤に限らず、何にても差支の事あらば、遠慮なく申されよ。必ず用立つべし。』といひし事ありき。斯の如くすれば、百事差支なきものなり。汝國に歸り、新に一家を持たば、必ずこの心得あるべし。又、汝今壯年なり。終夜いねざるも障なかるべし。夜々寝ぬる暇を勵まし勤めて、草鞋一足或は二足を作り、明日開拓場に持出し、草鞋の切破れたる者に與



報 德 二 宮 神 社

へんに受くる人禮せざらんと、もと寝ぬる暇にて作りたるなれば、其の分なり。禮を云ふ人あれば、それだけの徳なり。又、一錢半錢を以て應ずる者あれば、是又一きはの益なり。能く此の理を感銘し、連日おこたらずば、何ぞ志の貫かざる理あらんや。われ幼少の時の勤、此の外にあらず。肝に銘じて忘るべからず。』と。

翁曰く、世の中は今事無しといへども、時に變なき能はず。これ恐るべきの第一なり。變ありといへども、これを補ふ道あれば、變なきに等し。變ありて補ふこと能はざれば、大變に至る。古語に、三年の貯蓄なきは國にあらず。といへり。兵隊ありといへども、武具・軍用備らざれば、すべきやうなし。家も亦然り。夫萬の事餘裕なければ、家を保つこと能はず、國家・天下を保つこと能はず。人は予が教を儉約を専らとするものといへど、儉約を専らとするにあらず、變に備へんが爲なり。人は予が道を積財を勤むるもの

といへど、積財をつとむるにあらず、人を救ひ世を開かんが爲なり。と。

翁曰く、禍福といふものは二つあるにあらず、元來一つなり。近く譬ふれば、庖丁を以て大根を切るときは福なり、指を切るときは禍なり。只物を切ると指を切るとの違のみ。それ庖丁は一なり。而して、指を切れば禍とし、大根を切れば福とす。されば、禍福といふも人事の私にあらずや。水も亦然り。畔を立て、引けば、田地を肥して、福なり、畔なくして引けば、肥土流れて、田地瘠せ、其の禍いふべからず。それ

水は一なり。畔あれば福となり、畔なければ禍となる。富は人の欲する所なり。然れども、己が爲にするときは、禍之に隨ひ、世の爲にするときは、福之に伴ふ。財寶も亦然り。散ずれば福となり、積んで散ぜざれば禍となる。これ人々の知らざるべからざる道理なり。」と。(二宮翁夜話)

一二 金米糖の壺

柴田鳩翁

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、一同座に就きますると、様々の馳走がでる。

*人名は亭、京都の
人心學の講話を
して諸國を遊
歴す。天保十年
歿す。

時に、かの年寄は酒といへば見ただけでも酔ふ程の下戸ぢや。座中を廻る杯の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりとも御取りくだされい。」と、南京の古染附けの壺に大りんの金米糖を入れて年寄の前へ持つて来る。座中も「これは好いお心附。ひらにお菓子を召上られい。」と薦める。年寄もわるうはなし、然らば、頂戴を致しませう。」と、壺を引きあげ、手首を突込みしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて、撮み

出さうとするに、手首がつまつて抜けませぬ。どうぞして抜けるかと、色々にこじまはして見ても、引張つて見ても、抜けずまごくして居らるゝと、側から見つけて、どうなされましたぞ。「いや、手が少し詰りました、思ふ様に抜けませぬ」と眞顔になつていはるゝ。「それは氣の毒。私が壺を持つて居りませう。無理無體にお手をお引きなされ。」と二人が向へ廻つて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引合ふ有様、景清と美保谷が銜曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄

七兵衛平景清
美保谷十郎

はなか／＼笑はず泣顔になつて、どうも痛んで抜けませぬ。」といふ。さあ、これから大騒になり、醫者どのを呼んで來い。接骨ではいくまいか。」と酒宴の興も醒めはてました。

時に五人組が一人進み出で、いづれもお騒ぎなされな。我等承つたことがある。昔、司馬溫公といふ人、幼きとき、大勢の小兒と共に大きな壺のほとりに遊びましたが、一人の小兒、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つて、か

*名は光、宋の名臣
一六七九—一七四六

の壺へ投付けましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助りました。」と或人の話ぢや。今お年寄の御難澁はこの話によう似て居る。いざや、我等が司馬溫公となつて、たとへば、その古染附けの壺が、失禮ながら、何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ。」と、しかつべらしく煙管を提げ、向へ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突出すと、只一打に碎いた。何がさて、座中は金米糖が散らかつて雪を降らした様になると、「やれ、お年寄、お助りなされたか。」と其の手を見れば、抜けぬこそ道理なれ、金米

糖を一杯つかんで居られたと申すことぢや。何と、をかしい話ではござりませんか。

つかんだものを放しさへすれば、自由自在に手は抜けたものを、一度つかんだら首がちぎれても離すまいと片意地なりまれつき、それで、自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申せば、金錢の事のやうなれど、つかむものはこればかりではない。器量のよいのをつかみ、賢いをつかみ、負けをしみをつかみ、家柄をつかみ、身代のよいをつかんで、離すまいと、かつぎ歩くによつて、教を聞く事もならず、樂をする事

もならず、慎も出來ず、せん方なさに癩氣抑へたり、顔しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとは氣の毒なものでござります。壺割つて仕舞うてからは、何いうても詮ない事ぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。(鳩翁道話)

一三 豊臣太閤の文事その一

三 上 参 次

從來、豊太閤の人物事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記・繪本太閤記等の書にして、三國志・漢楚軍談

などと共に普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、また、講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜しいかな、此等の書には、武邊の偉人としての太閤は稍描き出されたれども、其の他の側面は、殆ど全く忘却せられたる如く、間又、いみじき誤謬をさへ流布したり。太閤が無學文盲の人と傳へられたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。

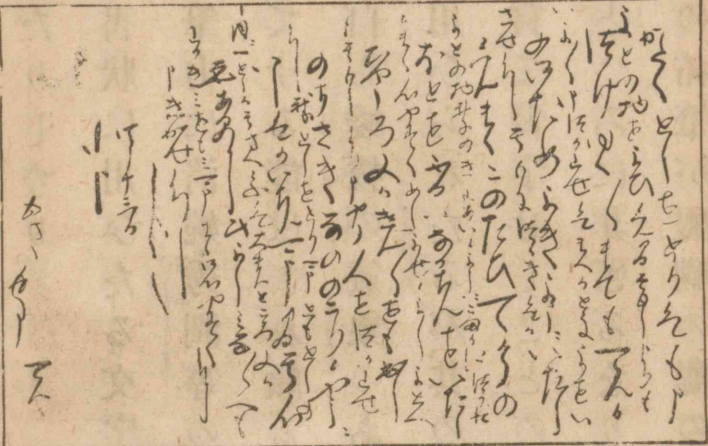
磨けば益、光り、鑽れば彌、堅し。眞に偉大なる人物は子細に研究するに従ひて、一層其の光彩を放つもの

なり。予は今太閤が一面にては雄才大略の人なり
 と同時に、一面には決して
 無學文盲にあらざりしを斷
 言し得るを喜ぶ。抑、太閤は
 一代の事蹟頗る多く、事業の
 規模甚だ大なり。故に、舊大
 名たりし華族の諸家、古社寺
 舊家等に太閤の文書の傳へ
 らるゝもの、其の幾千なるを
 知らず。公の祐筆たりし太田和泉守牛一・大村法橋



豊 臣 秀 吉

由己・楠長・譜正・虎等の文章家
 の手に成りたりと思しき、雄
 健にして生氣に富める文書
 其の大部分を占めたりとは
 いへ、確に太閤の自筆なる色
 紙短冊消息の類も亦少なし
 とせず。西に東に遠征せる
 先より母なる大政所夫人な
 る浅野氏若しくは、秀頼等に
 贈りたる書狀の如きは、親子夫婦の間柄の事なれば、



秀 吉 手 蹟

もとより祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。

書狀に用ひたる文字は大抵平假名なり。書體及び筆力に清婉・秀潤等の讚美の辭を加ふることこそ敢てする能はざれ、頗る圓熟したるものにして、その中自ら峻拔の氣象のあらはるゝを見る。漢字もまた用ひられたるが、其の崩し方も無下に卑しからず。嘗て習字せしことの無き人には決して能くし得るところに非ざるなり。江村專齋の「老人雜話」に、太閤の祐筆が醍醐の醍の字を忘れて、とみには思ひ出で

*豊臣時代の儒醫。

ざりしを、大の字を書けよといひし談を記せるは、太閤の簡易を喜び、敏捷を尙びしをいへるにて、少しも漢字を知らざりしをいへるには非ず。軍陣にての消息などは、咄嗟に文章を成したるにて、字句の鍛鍊なしといへども、天真爛漫、辭簡にして意達し、少しも凝滯する所なし。而して、その間に溢るるばかりの愛情あらはれ、趣味の津々たるものあるを覺ゆ。天正十八年、小田原在陣の中に、母なる大政所へ上りし書中に「そもじさま御ゆさん候て、きをもなくさみ、わかく御なり候て可給候。」たのみ申候。」の

語あり。千言萬語を費すとも、子の親に對する愛情は此の「若くなり給はれ。」の一語より適切なるものはあらず。又、その政所淺野氏への書中には「ねんごろに文給はり、御げんざんのこゝろしてねんごろにみらる。」ことし内にはひまあけ可參候。心やすく候べく候。かならずとし内に參候て御目にかゝり、つもる御物がたり可申候。等の句あるなり。祐筆の手に成りたる文書の中にも、かしここゝに太閤の口授にかゝれりと忌はるゝところあり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長したる人の習なれば、太閤も多

少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り、撥亂反正の功を奏するには、多少かゝる氣風の必要もありしなるべし。しかも、古文書の上より觀察するときは、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては最も慈悲の念に富みたる善良なる紳士なりしを見る。

一四 豊臣太閤の文事その二

三 上 參 次

さて、太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十四

日、太閤禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛と咲
亂れたるを賞でて、其の下に徘徊せり。正親町帝之
を聞こしめし、やがて、畏くも敕使を遣し、花の折枝に
一首の御製を添へて下し賜ひしかば、太閤感謝に堪
へず、即ち

忍びつゝ霞とともにながめしも

あらはれけりな、花の木のもと。

と返歌を上られき。又、天正十六年の事なりけり、北
山に狩して龍安寺龍安寺に憩へる事ありき。頃しも春の
最中なりけるに、庭前の枝垂櫻未だ綻びず、却て淡雪

*山城國葛野郡花
岡村に在り。細
川殿元創立。

のちらくくと降り來りしかば、太閤おもしろく思ひ
て、

時ならぬさくらの枝にふる雪は

花をおそしとさそひ來ぬらん。

と詠まれき。感興、想ふべし。文祿三年、諸大名を率
ゐて吉野吉野の花見を催されし時、關屋の花の下にては、
吉野山、たれとむるとはなけれども、

今宵も花のかげにやどらん。

と吟じ、藏王堂にては、
歸らじとおもふ家路を、入相の

*大和國吉野郡

かねこそ花の恨なりけれ。
と歌はれたり。巧を弄ばずして、なかくに雅趣に
富み、格調も亦平凡ならずして、古の撰集の中にも置
きたき心地せらる。

此の他、紀州征伐のときには、和歌浦・玉津島にて、小田
原陣の折には、清見瀉にて、征韓の役には、肥前の名護
屋などにての詠歌も少なからず。天正十六年の聚
樂第への行幸のときは、勿論醍醐の花に、大佛の月に、
その折々の歌多く、時としては、大宮人の昔を忍ばし
め、又、時としては、古英雄の横梁賦詩の面影を想はし

天正十三年、根
來寺を討つ。
天正十七年、北
條氏を伐つ。
文祿九年

山城國宇治郡、
醍醐寺。
洛東方廣寺、豐
臣秀吉創建。
魏の曹操の故事

む。而して、功成り名遂げたる、此の千古の偉人にも
亦無常を感じたる事のありてや、月明星稀

露とちり雫ときゆる世の中に、鳥驚奇飛

何とのこれる心なるらん。

と嘆きしこともありしが、慶長三年八月薨去せらる
るや、あはれにも

露とおき露と消えにし我が身かな、

なにはのことは夢のまた夢。

といふ辭世の短冊をとめられき。げに、太閤は伊
達政宗・細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして文

元龜、天正より
慶長、元和より
振ひし武將を
三つて、奥州に
足利の末葉より
徳川の初世に
吉家、信長、秀
歴仕したる武將

藻ありしうちの錚々たる者なりしなり。
 確に太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは、短冊に
 して予が原本を目撃したるもののみにて、二三十
 はあるならん。加之、太閤は、時には、學者をして往事
 を談ぜしめて之を聽き、又、禪學の書の講義をも聽き
 たりき。我が國人が誇るに足るべき此の大偉人は、
 決して無學文盲ならざりしなり。
(豊太閤に關する研究)

(二) 備前岡山の人、
南郭門下の儒者、
天明元年歿す。

◎ 曾呂利の頼才

湯 淺 常 山

堺の鞘師始て太閤に謁しけると、太閤、汝の姓名は何と

(三) 泉州堺の人、慶
長八年歿す。

申すぞ。」と問はせけるに、その者の答ふるやう、臣が姓名は
 曾呂利新左衛門と申し候。」太閤は、あ、奇な姓もあるも
 のかな。して、その曾呂利と申す姓には、何ぞいはれにて
 もあるか。」と問はせけるに、また答ふるやう、聊かいはれこ
 れあり候。別儀にあらず、臣の拵へたる鞘は堅くしてそ
 ろりと入り、敢てつかへず。こゝをもつて曾呂利と申し
 候。」太閤、こは奇なり。復た折節來らるべし。」と。
 新左衛門あるとき、太閤に向ひ、ねがはくは、一日御耳の香
 を嗅がせられたし。」と申しければ、太閤はいぶかしく思ひ、
 「こやつまた何をかなすらん。」と疑はれしが、何はともあれ、
 宜し。汝がよきに嗅げ。」と許さる。曾呂利、諸大名の御機

嫌伺に出でたるときを窺ひて、太閤の耳元に口寄せて、何やら言ふ體なれば、皆々心中に密かに驚き、かやつ何をか言ふらん。若しやわれを讒言するにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛を得をれば、かやつが言ふこと御用ひあらんも測られず。と、各、屋敷に歸りて、早々數多の金銀財寶を調へて、密かに曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山の如く集ひける。曾呂利ある日、太閤の御前に出でて、謝して申しけるやう、殿下、一日御耳を拜借して、そのかくはしき香を嗅ぎたる效能によりて、金銀財寶山の如く集ひ來りて、殆ど坐する餘席これなく候。これ全く殿下が御耳の效能なり。と申しければ、太閤呆然

として驚かれけりとなん。

又、ある日の事なり。太閤嘗て金銀の蟹を數多造らせ、庭の泉水或はその近傍に放ちて樂となし居られけるを見厭きたりとして、此の日、近習のものに、何にても一用をいひ出づる者にはこれを與へん。と申されけり。皆々大に喜び、臣はこれを紙押になさん。といひ、あるひは、臣は茶釜の蓋の取手になさん。といひ、或は、何といひ、彼といひて、各、一個を賜はる。新左衛門、臣は人間の相撲も既に見厭きたれば、この蟹を賜はりて相撲を致させたし。と申しければ、太閤相撲とありては、五個や十個にてはその興薄かるべし。悉く持行くべし。とて、残れる蟹を皆新左衛門に與へ

られけりとなん。その頓才實に驚くべく、感ずべし。

(常山紀談)

名は宗易、泉州堺の人、茶人の目正十九年秀吉の旨に違ふ所ありて死を賜ふ。明治初年の人、和學者。

一五 茶僧利休

堀 秀 成

豊太閤大阪城におはしたる時、その傍を離さず寵愛せられたる曾呂利新左衛門、茶僧利休と甚だ不和なりければ、何の時に利休に不都合をなさしめんと考へ居たるに、或年の冬日の暮るゝ頃より、雪頻りに降出で、夜半に至りて地に積ること七八寸にも及びぬ。時に、新左衛門思ひけるは、かゝる大雪の夜半に

至りては、彼も怠りて、御茶屋の爐の火もたやしたらんに、にはかに御出あらば、さすがの利休も困却すべしと考へて、太閤の寢所の御次まで参り、襖ごしに申しけるは、「いかに、御寢ならせられしか。雪おもしろく降りて、御庭の植木美しうなり候ふ。かゝる折、時雨の御茶屋に成らせられ候はば、さぞと存じ候ふ。」と申しければ、太閤目をさまされて、「いかにも、然るべし。手燭を點ずべし。」とて、寢衣の上に胴服を着せられて立出でらる。

新左衛門前に立ちて、庭の飛石を傳ひつゝ、時雨の茶

屋に至り、折戸の此方より聲をかけて、利休殿、只今これまで成らせられぬ。」と告ぐ。利休速かに答へて、折戸口まで迎へ奉り、御先に立ちて、植込の枝にかゝりたる雪を拂ひつゝ、圍の内に入れ奉るに、新左衛門もつゝきて入る。さるに、何時の間にか爐につぎたる炭は盛におこりて、釜の湯松風の音をたて、爐の内の薰物かをりて、早梅の香にあやまたれたり。新左衛門は案に相違して、この雪夜の深更によもやとおもひしに、さても油断なき利休かなとあきれけり。かくて、利休は茶一服立て、まゐらす。太閤も宵の宿

酒なほ名残あるところに、思ひがけ給はぬことなれば、常にまさりて賞せられけり。新左衛門、今は我が策も空しくなりぬ、何をがなしてと考へしが、かゝる深更に湯漬を命ぜられたらんには、利休もこれには困却すべしと案じつきて、太閤に申しけるは、夜もいたくふけぬれば、定めて御空腹におはしまさん。御湯漬を仰せ出されて然るべきか。」と申しければ、太閤、いか



利休

にも、然るべし。」と仰せらる。

利休かしまりて、水屋に立ち、先に御迎に出でし時、植込になれる柚の實を二つ取りて袂に入れ來しを、その肉を忍ぐりとりて味噌をつめ、爐にて焼き、綿入服紗に包みたる飯櫃より飯を盛りて奉る。太閤、山海の珍味に飽かれたるところに、思ひがけぬ柚味噌を奉りたりしかば、殊の外御意に適はせられ、利休が職務の上に深く心を用ふることを喜び給ひて、加恩の御沙汰さへありけり。新左衛門も、今はせんかたなく、却て利休の職務に油斷なきことをいよく感

じけりとなん。

(説教講録)

*早稲田大學名譽教授文學博士

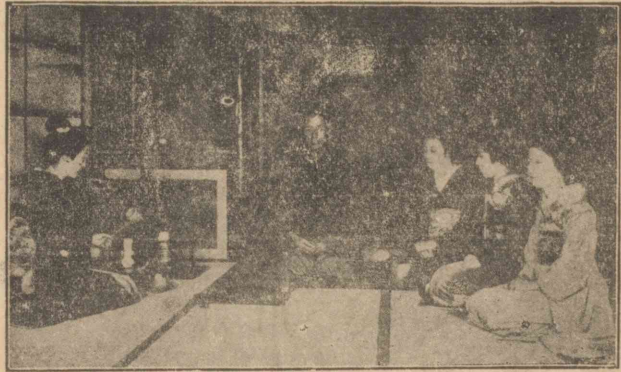
一六 茶の湯と生花

坪内 雄藏

凡そ茶を味ふに三様の法あり。急須・土瓶などに普通の茶を煎じ出して用ふるを煎茶といひ、特製せし茶を臼にて碾きて粉とせしもの少量に熱湯を注ぎて、かきまはして、泡立たせて用ふるを薄茶、その稍多量なるに熱湯を注ぎて、かきまはして用ふるを濃茶といふ。濃茶・薄茶には種々の方式あり。之を茶の式と名づく。

*足利義政の時代

茶の湯は東山時代に始り、其の流派甚だ多し。千家



茶の湯

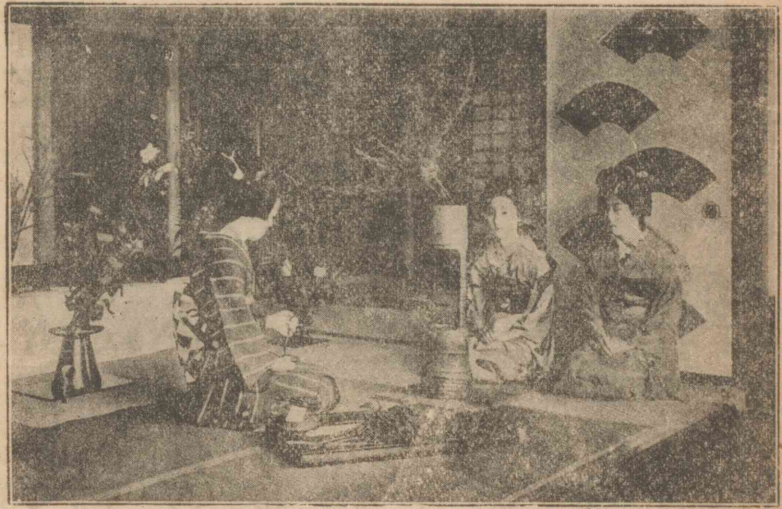
有樂石州等の流派の中にて、最も廣く行はるゝは表裏の兩千家流なり。昔は清雅なる娛樂の間に、禮式作法の要旨を教へて、武人のあらゝしき心を和げ、かねては奢侈を戒めんための遊なりしが、徳川時代に及びては、一種の表だちたる禮式として用ひらるゝに至りたり。今も尙中流以上の社

*本朝最初の遺隋使

會にはしばぐ、行はる。

生花は手折りたる花を瓶又は盆に移し生けて、室内の風情を添へ、床の間の飾となす法なり。傳説によれば、聖徳太子が花の枝を水に生くる法を小野妹子に授けさせたまひしに始れりといふ。妹子はいはゆる池坊流の遠祖なりとぞ。池坊の外に、なほ遠州流などいふ派もあり。

花を生くる器には瓶を用ふるを通例とすれど、時としては竹筒・砂鉢・薄ばたなどいふ器をも用ふる事あり。又、籠製の花活竹にて編みたる、藤蔓にて作りた



花 生

るなど、その種類いろくあり。
花の種類及び生け方は、いづれも器につれて差別あるべし。又、床の間の位置、置物・掛物の種類、庭などによりても多少の工夫あるべきなり。
これを要するに、茶の湯の本意は主客の秩序を正し、

*東京帝國大學
理學部植物學
教授、博士
者

坐作進退の禮法を定めて、溫雅靜閑を旨とす。故に、その精神に通ずることを得ば、必ずしもくたくしき儀式を學ぶに及ばざるべし。
生花もまた同じ理なり。強ひて枝を曲げ、作り撓めて、自然の風情を損ひたるは、醜し。なまなかにある流儀に泥まんよりは、手折りたるまゝを投入れたるが、風流の本意にかなふことあるを忘るべからず。

(國語讀本)

一七 植物と季節

三* 好 學

季節の循環に伴つて起る植物體の變化を調べて見ると、暖帶地方のやうに四季の區別のある處では、大抵の植物の發生は春になつて始るもので、我邦の中央部では、三月の節になると、已に色々の植物が若芽を萌して來る。それから、日増に芽が肥つて來て、三月下旬から四月上旬に至る頃には、そろ／＼若葉が披き出す。尤も、植物の種類に因つては、葉の出る前に花の咲くものがある。例へば、梅、彼岸櫻などは、葉が花よりも後れて出る。併し、一般には、葉が先に出て、花が後で咲く。

此の若芽の萌して來た時が丁度春の氣候に成りかける頃で、是からして植物が十分に繁茂する。總べて春になると、自然界の光景が頓に變つて來て、草の色、鳥の聲、見るもの、聞くものにつけて愉快の情が起る。是は冬の間潜んで居た動植物の生態が、再び活動を變化し、如何に人心を感動させるかが分る。それから、五月になり、六月になると、所謂若葉の時節で、森林も庭園も、草木は勿論、こけ類までも、見る處のもの一として、青でないものはない。又、此の頃には、

桃・藤・棣棠・櫻草・躑躅・牡丹など、色々の花が咲いて、麗しい。

それから、七八月の萬緑の頃になると、葉が全く發生を遂げて、組織も固くなり、葉綠素も十分出來て、青さが一層濃くなり、葉の色が薄暗く見える。是が亦夏の極く熱い、日光の烈しい時節に適して居るので、何程強い光や熱でも、眞青な森や立木のために柔らげられて、涼しく感じられる。

秋になつて十月の節に移ると、色々の木の實草の實が熟して落ちる。又、木の葉が黄ばみ、又は、赤くなつ

て來て、夏の盛りに眞青であつた葉の色が急に變化する。樹木の葉は夏の間大切な生理作用をして、澤山な食物を拵へて、之を幹や根へ送つて貯蓄して來たので、秋になつて自分の役が濟むと、段々に枯れて、落ちてしまふものが多い。其の落ちる前に立派な色が著いて、紅葉の美を現すが、何となくあはれに思はれる。それから、十一月木枯の吹く頃には、樹木の葉がバラ／＼落ちて來る。又、此頃の枯野の景色は一層寂しく見えるが、是も其の季節に應じて適當なる現象で、寂しく憐れな中にも、亦一種の趣がある。

暖帶地方では、斯様に四季の交代がはつきりしてゐて、年々歳々同じことを繰返して居る。毎年咲く花は同じで、紅葉の色にも亦變りはないが、いつも其の季節になると、吾々の感情は自ら一新して來る。夫で、四季の交代するのは、人の心を厭かせないやうにする上に於て、最も大切と思はれる。是に反して、熱帶地方へ行つて見ると、例へば新嘉坡でも、(一)コロンボでも、又、瓜哇(二)でも、四季の區別がなく、冬の真中でも花が咲き鳥が囀り、木の葉草の葉も始終青々として、實に見事な有様である。恰も大暖室の中、又は、極樂園

(一) 馬來半島の海峽
植民地 英領
(二) セイロン島の都
會
(三) 馬來群島の一、
和蘭領

の裡に住んで居るやうに思はれるが、さて、一月暮し、二月暮し、一年、二年、又は、數年も居ると、其の間に季節の變化もなく、自然の景色が始終同一様であるから、段々に厭きて來る。矢張、暖帶地方のやうに、四季の變化のあつて、其の時候に應じて景物の變つて行く方が人の心を厭かせない。

季節の循環によつて植物の景觀が變る有様を見ると、春の野、春の山、夏の森、夏の水邊、秋の野、秋の山、冬の林、冬の海邊など、それ〴〵特別の景色がある。同じ山、同じ野、同じ水でありながら、季節によつて趣が違

ふ。今、季節の循環によつて景色の變化が如何に人心の感動を支配するかに就いて二三の例を舉げて見よう。

春先き、山櫻の咲いた麗らかな空合、又は、菜の花に胡蝶の戯れる長閑な日和には、人の心も何となくゆつたりとして居るが、之に反して秋の眞中の槭樹、野葛などの葉が赤くなり、公孫樹や石榴の葉が黄ばんで、次第に落ちて行く時には、よし、林の中に鳴く鹿の聲や、空行く雁の音を聞かなくても、物寂しく思はれて、春の感情とは全く別である。

野原でも同じこととて、蒲公英、土筆、紫雲英などの咲き揃つて、胡蝶の戯れて居た春の野も、秋になると、すっかり變つて、風にそよぐ枯尾花や、又、馬蘭、薊、しらやまぎくなどの花が僅かに名残を留めて居る間に、鶉の飛ぶのを見るやうになる。

斯様に春と秋との景色の上で、吾々の感情が全く變つて來るのは、主として植物が季節に因つて變化して行くからで、是も獨り暖帶地方にばかり見ることの出來る現象である。

(植物生態美觀)

*國文學者歌人、
明治四十三年十
月段す。



一八 太平洋

大和田建樹

怒る波、さかまく潮、打たば打て、襲はば襲へ、
龜の住む島と榮えて、苔のむす巖とたちて、
はてもなき太平洋の、海原に、輝き出でし
日の本つ國。
人の世は變り行けども、變らぬは海原の色。
國の様移り行けども、うつらぬは波風の聲。
ひと筋の天つ日嗣を、戴ける國は動かじ、
千代に八千代に。
言とはん、太平洋の、海遠くあそぶ嵐よ、

かくの如、動かぬ國は、天地にたぐひありやと、
神代より根ざし堅めて、君と臣、ひとつ心の
國はこの國。
夜は明けぬ、年は還りぬ、鏡なす初日の影は
亞米利加の岸まで續く、海原に浮び出でたり。
誰か見て仰がざるべき、國民の心もならへ、
光みがきて。

一九 極地の探検その一 新保磐次

極地探検、これ近代の一大事業なり。遠く本源を尋

ぬれば、極地の探検は最初營利的より起りて、後に學術的となれるなり。大昔の事は暫くおき、我が戰國時代の前より、葡萄牙人は亞非利加の南端なる喜望峰を廻りて東洋に出づる航路を發見し、盛に印度と交易せり。英國人は之を觀て、更に一層便利なる近路を求めて彼等に鼻あかせんとて、こゝに極地の航海に力を用ひそめたり。げに、地球儀にて見る如く、歐羅巴より東洋に至らんには、喜望峰を廻らんより直ちに北氷洋をつきぬくる方遙かに航路短ければなり。鯨は北海に多く住めるが、その何れの邊に最

も多く住めるかを探検するも、亦目的の一なりき。已にして、北極航路の困難にして實用に適せざることを知るに及びて、目的は變じて學術的となり、専ら氣象、磁石力、陸地の分布、動植物等の調査をなすに至りぬ。

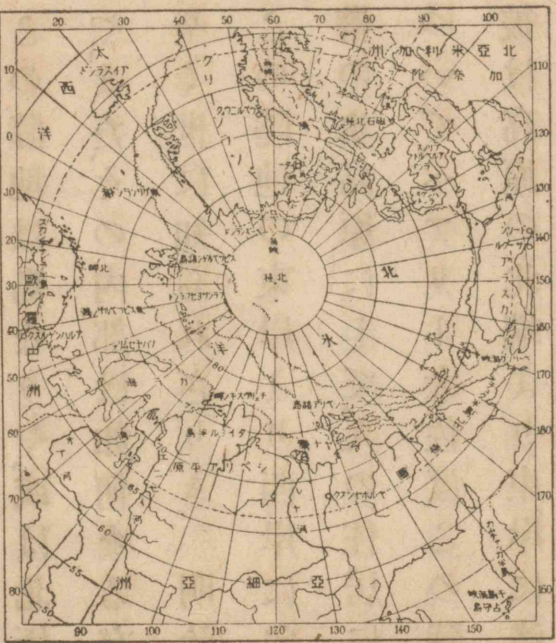
極地は、嚴密にいへば、極圏以内なり。北極圏は吾が千島の占守より直徑約五百里にして、これより北極點に至るには、更に直徑八百里なり。占守の嚴寒、氷雪、交通の不便、食料の不自由等を聞けば、そこに移住せる人たちの上を思ひやるだに涙の種ならずや。

まして、極地のことなれば、風雪の險惡なる、固より筆舌のよく及ぶ所に非ざるべし。無數の大氷塊は海を蔽ひて流れ來る。熟練なる船員は右に避け左に逃れ、務めて衝突を防ぐといへども、時として氷塊に挟まるゝときは、船は大抵押しつぶさる。一日の行程僅かに一哩餘に過ぎざることあり。或は氷雪に閉ぢられて進退こゝに谷り、氷の中に穴を掘りて、その内に數月を送ること少なからず。かゝる間に、限ある食料は盡き、或は久しく果物・野菜を食せざるため、壞血病に罹り、一隊の勇士枕を並べて氷海孤島の

中に死することあり。有名なるフランクリン探検隊の全滅も亦かくありしなり。往年、丁抹人ブレンドンが飢寒の爲に死せし時、最後の日記には左の如く記しありき。

余は北緯七十九度に於て次第に缺けゆく月の下に死す。余が足は凍り、四邊は暗し。行くこと能はず。二友の屍はこの灣の中央にあり。學術のため、國家の名譽のためとはいひながら、何ぞそれ最期の悲惨なるや。かゝる困難の中に、非常の大功を立て、世界の賞賛を

博せし豪傑亦少なからず。茲にその二三を紹介せん。第一はノルデンショールド、第二はナンセン博士、第三はペアリー大佐なり。ノルデンショールドは鑛物學者にして、瑞典國より派遣したる探檢家なり。彼は亞細亞の北を通過して東洋に出でんとせり。途中氷に鎖されてそこに越年せしかど、その間種々の學術上の觀測をなし、遂に亞細亞の東なるベーリング海峽を経て東洋に出で、其の使命を果しぬ。歸途我が國にも立寄りて、盛なる歡迎を受けぬ。こは明治十三年のことなりき。



嘗て徳川三代將軍の時、英國の一探檢家は、國王より我が日本に寄せらるる書を奉じて、同じ航路に就きしが、志を得ずして途中より歸りき。かくて、此の航路全部を通過せし者は、古今唯ノルデンショ

ールドあるのみ。

ナンセン博士は諾威の動物學者なり。ペアリー大

佐はもと米國の土木技師なりき。北亞米利加の東北にグリーンランドありて、大部分極圏の中にあり。この陸地は島なりや、或は北極まで續ける大陸なりや、また、その内部は如何なる有様なるか、近頃までは全く世に知られざりき。明治二十一年、ナンセンはこの陸地の東岸より西岸に向つて横斷し、内部は一帯の氷高原にして、人の住居に適せざるを報告せり。ついで、ペアリー大佐はこの陸地の北部を横斷せり。彼は高原の北端より東岸に達し、海拔四千尺の氷の崖の上に立ち、四方をきつと見渡すに、洶涌たる氷海

は東より北に周りて、此の陸の北極に接せざることを見せり。その時の心地、いかに雄快なりしぞや。ペアリー夫人はこの遠征に同伴して、途中良人の病を看護し、遂に偉功を成さしめたり。

二〇 極地の探検その二 新保 磐次

この後、ナンセン博士は、流水の北極點附近を通過すべき経路を考へ、之を利用して北極に至らんと期せり。明治二十六年、彼は堅牢なる一種の船を造り、古來探検家の大敵とせる流水に乗じて極海に漂流す

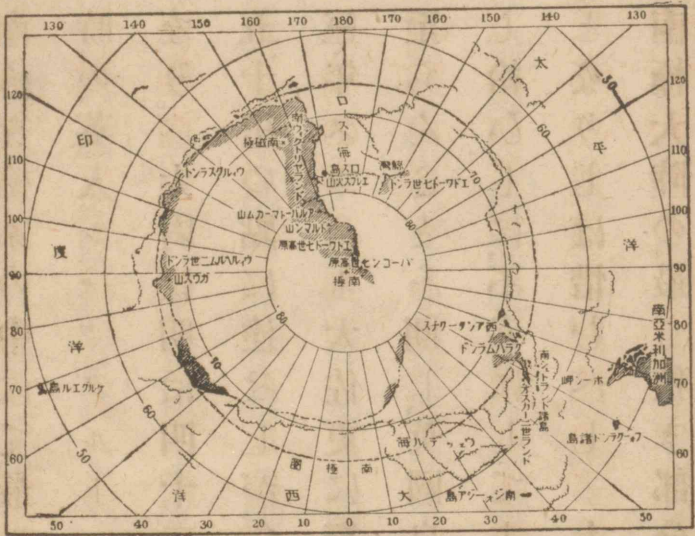
ること凡そ一年半、流水が稍北極に遠ざからんとするを見るや、決然として船を捨て、上陸し、橈によりて北極に向ひぬ。彼はいかにして再び歸るべき。大膽といふも餘りありといふべし。彼は、行けども行けども高低凹凸の氷原にして、恰も滄海の大浪がそのまゝ凍りつきたらんやうなるを見て、只荷物の積卸しに年を重ねべきを念ひ、慨然として歸途に就きぬ。かくて、或時は流水に乗り、或時は革船に乗り、千辛萬苦の後、とある島に着き、料らず英國の探検家ジャクソンに逢ひ、ジャクソンが小屋に伴はれて温

き待遇を受けたり。ジャクソンが日記に

小屋にて湯と石鹼とを與へて身體を洗はしめしに、三年の垢と脂肪とは容易に落ちず、數回ナイフにてこそげ落して、少しく清潔になりたり。と記せり。其の勞苦、想ふべし。かくて、ナンセン博士は遂に歸國して大探検家の名譽を得たり。一方には、ペアリー大佐亦北極點を志し、遠征數回、その間、兩足凍傷して、八本の指を切斷するに至れり。然れども、大佐は毫も屈せず、撓まず、遂に明治四十二年四月六日を以て北極に達し、こゝに米國の國旗を

立てたり。この時最低温度は華氏零下三十三度なりきといふ。蓋し、北極は極地の最寒點に非ざるなり。

南極圏内の探検は明治より凡そ百年ばかり前に始れり。この探検は航路發見を目的とせず、たゞ捕鯨家の副事業と純粹なる學術的觀測とに基づけり。近代の事なればにや、悲惨なる遭難の事實は北極地方の如く多からざれど、暴風雪は南極の一名物にして、其の他、内地凹凸の多き等、探検を困難にする事情少なからず。この中にありて能く探検家を歓迎し、



め、首を屈して敬禮し、夫より人語の如き調子を以て

遠征の勞苦を忘れしむる氣樂者あり、名をペンギン鳥といふ。この鳥身長四尺ばかり、翼短く、兩足を以て直立して雪中を歩むさま、頗る人間に似たり。各群中に王あり。一群皆王の後に随つて列を成し、人間の來るに逢へば、歩を止

長々と呟くこと、恰も歓迎演説をするが如しといふ。南極探検家の中にて、最も著しき功を収めたるは近時の英人シャックルトン大尉と同スコット大佐となり。大尉は明治四十二年南極を距ること僅かに五十里の點に達せしが、食料盡きて引返しぬ。四十年スコット大佐更に探検の途に上り、必ず南極に至らんことを期し、英國皇后陛下は爲に國旗を親授し給ひしに、不幸にして志を遂げず、空しく極地の鬼となりしは惜むべし。大正三年シャックルトンは南極大陸の最も狭き部分を横斷せんとして成功せ

ざりしが、これによりて未知の新陸地發見せられたり。

名は蓋

吾が國に白瀬輻重兵中尉あり。早くより極地探検の志を抱き、身を寒地の氷雪にならしつゝありしが、ペアリー大佐の成功を聞き、又、スコット大佐の大志を聞きて、雄心勃勃々禁じ難く、勿々遠征の途に上りたりき。然るに、準備の十分ならざりし爲に、豫期せしほどの功を收むるに至らざりしは洵に遺憾なりき。若し、完全なる準備と非常なる忍耐とを以てその志を繼ぎ、更に探検を行ふものあらば、終に終局の目的

を達せんこと亦難きにあらざるべし。

二 いろくの花

清原深養父

冬ながら空より花の散りくるは、

雲のあなたは春にやあるらん。

讀人不知

緑なる一つ草とぞ春は見し。

秋はいろくの花にぞありける。

讀人不知

*平安朝中頃の歌人。

平安朝中頃の歌人。

鎌倉時代の歌人、太政大臣に至る。

白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の

數さへ見ゆる秋の夜の月。

曾根好忠

人は來ず、風に木の葉は散りはて、

夜なく、蟲は聲よわるなり。

西園寺公經

もみぢ葉をさこそ嵐のはらふらめ。

この山もとも雨とふるなり。

後鳥羽院

この頃は花も紅葉も枝になし。

暫しな消えそ、松のしら雪。

讀人不知

神無月、降りみ降らずみ定めなき

時雨ぞ冬の初なりける。

二二 ナイヤガラ瀑布 黑板 勝美

水の大は太平洋上、怒濤澎湃山をなす處にも見られる。曩に一萬三千噸のマンチュリア號に乗つて波浪の間を木の葉の様に漂蕩した時の光景は、今も眼前に髣髴する。併し、北米に於ける合衆國と英領加

*東京帝國大學文
科大學助教授、
家文學博士、國史

奈太との境、平野遠く連るあたり、オントリオ湖とエリー湖とを通ずるナイヤガラ河に懸れる大瀑布の壯觀に至つては、實に水の奇絶、怪絶なるものといはねばならぬ。毎年四方から集り來る觀光客が無慮七十萬人に上るといふも當然の事であらう。而も、此の天然を利用して四十萬馬力の水力發電所を設けて、幾多の都市の電燈、幾百哩の電氣鐵道等に電力を供給して居るのみならず、製造工業の原動力に用ひて居る處も亦數知れずある。今や、ナイヤガラの一小市は米國の勝地として天下に名高いばかりで

なく、工業の一中心地たらんとして居る。實に、米國に於ける天然の大と人工の大とがこゝに集められてゐる觀がある。

ナイヤガラ停車場を出て、プロスペクト公園へ行くと、近く廣さ一千六十呎の亞米利加瀧は、ゴート島を隔て、廣さ三千呎の加奈太瀧と並んで居る。共に一百六十呎の高處から白簾を懸けたやうで、その漲り落つる水量は實に一分間一千五百萬立方尺。つづいて、兩岸の斷巖絶壁が高く聳えて居る間を矢よりも速く流れて行く急流には、觀光の客を満載した



ナイヤガラ瀑布

小蒸氣船が上下するなど、氣宇が頓に大きくなるやうな氣がする。

併しながら、ナイヤガラの壯觀は、この遠望に盡きるものではない。亞米利加瀧の上、奔馬の如き急湍に横たはれるグリーン島を越えてまた橋を渡ると、木立繁きゴート島がある。下流遙に八百四十呎の大鐵橋を望み、亞米利加瀧を右に、加奈太瀧を

左に控へて、巨人の如く悠然と横たはつて居る。此の島の一角に立つて眺めると、霧となり雨となる飛沫に衣服は忽ち濕ひ、萬雷の一時に轟くかと疑はるゝ瀧の音に耳は聾せん許り。銀河の瞬間に落來るかと思はるゝ萬斛の水は瀧壺の巖石を打つて、水煙となつて蒸騰し、夕陽此に映じて、中天に一條の長虹を描き出す。その壯と美とを併せたる絶景は、如何なる名手の筆も寫す事は出來まいと思はれる。ゴート島の傍に、月島と稱する小さい岩島が横たはつて居る。明月の夕、月光に映ずる水煙の虹を生ず

る奇觀から此の名を得たとのことである。ゴート島の西端に沿うて小徑を辿り、下つて瀧壺の傍に出で、更に進むと、風洞ウインドキャビの奇勝がある。洞中に入ると、轟立した絶壁の間から凄然たる風の音、蹙蹙たる瀧の響が聞えて、耳は遠くなり眼は眩んで、呼吸も止るやうな感じがする。

再びゴート島の上に出て、プロスペクト公園に歸り、さきに望んだ大鐵橋を渡つて加奈太領に入り、机岩マシバの邊へ行くと、馬蹄形を成した加奈太瀧が眼の前に見える。其の雄大な光景は、亞米利加瀧の及ぶ所で

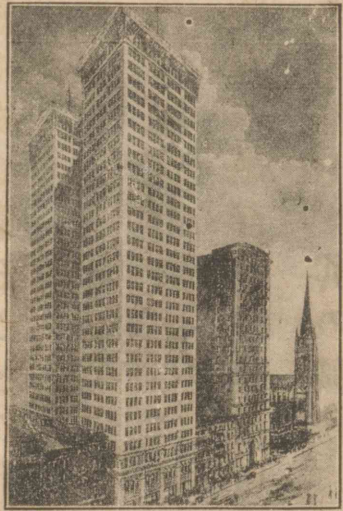
ない。昇降機で灌壺の後に出る仕掛、さては、ヴィクトリア女皇公園の設備など、加奈太でも此の勝景に對しては出来る丈の力を盡して居る。(歐米文明記)

二三 紐育その一

黑板勝美

紐育に入つて目に觸れるもの一として大といふ感を與へないものはない。ナイヤガラに於て天然の大に驚いた余は、此處に來つて、又、人力の如何に大であるかに驚かざるを得なかつた。紐育の前身新アムステルダムの小さい港から、米國の發達につれて

ますます發展して來た米大陸第一の都會は、今後十年を經過したならば、その人口は倫敦の上に出づるだらうとは、米國最頂の說である。五丁目通ブロードウェイ廣小路ブロードウェイ

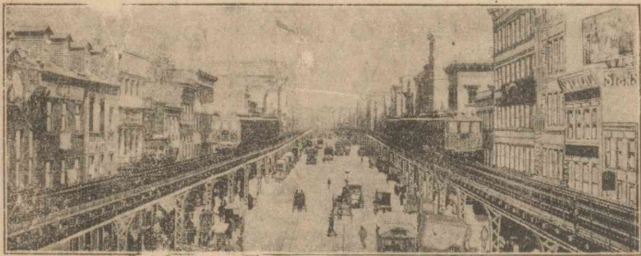


紐育の高樓

さては、東京の兜町ともいふべきウォール街あたりの下町は、肩摩轂撃ともいふべき所で、自ら歩かずとも、後から推されて何時の間にもやら四五町先に行つて居るといふ次第。街の兩側には天を摩する大厦高樓が争ひ立

つて、十五階・二十階ははや珍しからず、四十階から五十階の高樓が空中に聳えて居る様は、到底他の大會に於て見ることの出来ないもので、其の上層は雲に蔽はれるかと疑ふばかりである。

此等紐育市の中心に聳えてゐる宏壯な建物の中には幾十・幾百の會社・商店があり、幾千・幾萬の重役・書記等が忙しく其の職務に従事して居る。されば、或意味に於て、紐育はたゞに地上の都たるのみならず、又、空中の都である。横の都たるのみならず、又、縦の都である。地上の都を聯絡してゐる高架鐵道・地下鐵



紐育の交通機關

道・市街鐵道等の電車は、殆ど終夜運轉し、馬車・自動車は縦横にかけ廻り、町外れに住む者でも、十數分時を費せば、市の中央で買物をすることが出来る。是と同様に、縦の都には、何處にも三臺・若しくは、五臺の昇降機が設けてある。その中には、急行機といふのがあつて、是は十階以上だけの用に供してゐるのであるが、その速きこと殆ど目がまはるほどである。

「時は金である。」米國人の勞動神聖主義は、此の格言を切實に説明して居る。彼等は時を節するには如何なる設備をも敢行するのである、如何ほど多額なる費用をも之に投ずるに吝ならぬのである。又、彼等は決して金を惜しむものでない、金を儲けんとするものである。彼等は金を儲けんが爲に、時を活用せんとするものである。商業の中心點において雲表に聳える高樓を建つるのもこれがためである、市内の交通機關に惜氣もなく資本を投じて改良を計るのもこれがためである。昔に市内のみではない、

米國の汽車ほど快速力を有し、愉快な設備をして居るところは他に餘り見ることが出来ないのである。

(歐米文明記)

二四 紐 育その二

澁川 玄耳

(一) 紐育の繁昌

部屋は八階の上である。例の如く大きい窓が一つ、晝も電燈を點さねば薄暗い。窓の外は煉瓦壁が迫つて見ゆるのみで、厭きくしてしまふ。八階だなどと言つたつて、一向つまらぬ。まだ此の頭の上に四五階ある。隣の家は更に聳えて居る。家高きが

*もと東京朝日新聞記者

故に貴からず。こんな窮屈な處より、藁葺平屋でも、我が家の隠居屋の方が、杉垣越に法樂山が見えて、餘程好いと思ふ。

苔野は毎日飛廻つて來て、やたら無性に恐悅がつて、紐育の繁昌を説く。人が皆驅足で歩くとか、公園が人で埋つて居るとか、現に五十一階六百九十呎の家が有つて、今に百階の家が建つとか、大紐育市の本紐育たるマンハッタン島中に六百哩の街路があつて、一年に十二三億の通行人があるとか、郵便夫が一晝夜に千二百萬箇の郵便物の配達をするとか、四條の

線路を通ぜる三十五哩の地下鐵道が有るとか、電車線路が二百五十哩に上るとか、六百のホテル、三千の料理屋、五千六百の飲屋、四百七十五の俱樂部、五百の大小學校、九十の圖書館、二百の養育院、千九百の新聞雜誌、三十八の公園が有るとか、何千人も住はれる共同住家が幾千軒もあつて、一軒の中に料理屋、酒屋、煙草屋、小間物屋、銀行、電信郵便局、醫者、法律家、仕立屋、靴磨、床屋、風呂屋まで備つてゐて、屋根から外に出ることなしに一生涯でも住はれるとか、或社の新聞は一時間おきに發行して、一日百萬以上に達するとか、一

つの橋が二十町もあつて、昨日は二十八萬人通行したとか、手形交換所の交換高が今日は九億圓を越したとか、大業な事をのべつに列べ立て、己が手柄の様に誇りたてる。

一から十まで苔野は驚いて居る、感心して居る、喜んで居る、嬉しがつて居る。口を極めて、文明だ、進歩だ、發展だ、活動だ、現代の精粹だ、新世紀の權化だ、大々的だと、色々な言葉をまぜあはせて賞めちぎる。自分はまだ一見に及ばぬから、實否の程は解らぬが、彼がいふ通りならば、米國の文明、紐育の繁昌といふもの

は實際に仰山な人驚しと思はれる。唐の杜甫も句不驚人、死不休、とか言うて居る。米國人も此の點に於て詩聖と同じ心掛と見える。今に自分が病氣が治つたら、果して紐育が自分を驚かすことが出来るかどうか、一つ試みてやらう。

(二) 繁華の中心

僅々三十分、病間を偷んで近所を一巡した。なるほど、あきれたものだ。紐育は駭人府ロンドンシティに違ひない。動もすれば、うしろから人が衝きかゝる。餘程早く歩いて居る積りだが、やつぱりいかぬ。其の度に、兼て

の「御免なさい。」を持出さうとすると、まだ「エキス……」と言ひ了らぬ中に、其の人は十間許りも先に行つてしまふ。
家が高いの高く無いのつて、桑港や市俄古とはまるで別だ。五重の塔を十も重ねた様なのが両側に列つてゐる。天氣がどうかと思つて、仰いで見ても、幅の狭い空が細長う見える許り。併し、東京の様に電話・電信・電燈・電車の針金の蜘蛛の巣を張つて居ないのは心持が好い。
街は碁盤の目で、正しい。東京の路は眞直に行つた

東京の有名な
相撲取、今は既
に廢業せり。

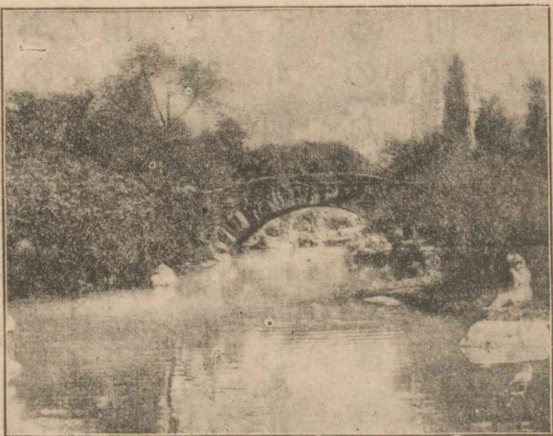
と思ふ中に、何時の間にか、右に見た日を左に見ること
とが珍しくないけれども、紐育では、そんな事は無い。
辻々に巡査が立つて居る。其の體格の立派なこと
常陸山ぐらゐるのは幾人でもゐる。巡査ばかりでな
い、通行人の中にもいくらでもゐる。たまさか小さい
のが來ると心頼もしく思つて、擦違つて、ふりかへ
れば、背に山を負うて居る脊蟲だ。
二階附の自動車に四五十人も人の乗つてゐるのや、
一つの馬車に五六間も高く荷を積上げたのが通る。
好くあれでぐらくくと崩れ落ちぬものと驚く。店

といふ店は悉く三坪も五坪もあらうと思はれる一枚ガラスを張りまはして、店の品が皆見える。ピカピカとした品物を恰好よく美しく飾り立て、晝も電燈がついて居る。紐育の中でも、此處等が繁華の中心、第五通りだ。賑やかで、美しく、頑丈で、綺麗で、引締つて、いやもう、驚く外は無い。

(三) 中央公園

世の中に贅澤なものは中央公園だらう。一坪何萬弗といふ高い地價のマンハッタン島、紐育の真中に、途方も無い、長さ三哩、幅半哩の廣大な地面。

紐育の住民は、たとひ如何なる長者の邸宅でも、庭園



紐育中央公園

といふものが無い。上へ上へと重なつて、重箱の中の薄暗い窮屈な住ひをして居る。家も道路も鐵か、石か、煉瓦か、セメント。土を踏み草木を眺めるといふをりは殆ど無い。まるで牢屋の生活だ。

如何に無風流な亞米利加人も、是ではやり切れない。日の光を好むのは草木ばかりで無い。なんぼ地下

鐵道で潜りなれても、まだ土龍とらごもにはなりきれぬ人間だ。やはり、草木と同じく日光を喜び、土と水とを慕ふのである。そこで、紐育のやうな處ほど公園の入用が有るのだ。呼吸こい抜きがなくてはならぬのだ。さすれば、中央公園は、四百萬の人間に對しては贅澤でも何でも無い、ぎり／＼決着の小公園とも謂はれるのだ。

何事も金に厭かせる亞米利加人だ、公園の拵も何のおろかがあらう。千畝の綠草風軟かに、萬幹の碧樹影濃かに、大道細徑其の間に通じて、屈曲逶迤、たどり

たどれば、丘が有る、谷が有る、複道空を互る所もあれば、脱路の闇を潜る所もある。池が有る、湖が有る、小川がある、泉がある、舟がある、橋がある、金魚が居る。呼吸つきに來る群集は大したものだ。或道筋の如きは、十町許りも樹影かげに椅子が兩側に續いて居る、それに殆ど空席が無い。夏の夜の寝苦しい時になると、椅子どころか、此の大面積が人に滿されて、此處に夜を明す者も少なからぬといふ。運動場の芝生には老若男女が打雜つて遊んで居る。西洋人の運動好きをなぜかと平生思つて居たが、身動きのならぬ

窮屈な住居をして居るから起つたことぢや。
金魚は人に馴れて居らぬが、禽は馴れて居て、手から
やる餌をくひに来る。珍しいのは栗鼠ぢや。ちよ
ろちよろと樹の間の芝生を走つて居るが、チュツク
と口を鳴らせば、後脚でちよいと立つて、覗く。南京
豆を見せてやると、ちよこくとやつて来て、捉るが
早いか、四五間去つて、とある樹の根に中腰をして、前
脚を使つて其れを咬る。誠に可愛らしいものぢや。

(世界見物)

二五 女中の周旋をたのまれし返事

寒さ身にしみ候處皆様御障もおはせずや母上
様御旅行中あなた様御一人にて嘸かし御忙し
き御事と御察申上候それにつきては先頃の御
たのみ早く御返事申上度存じ候ひし處父の用
事思の外に長引き昨夜やうく歸宅いたし候
次第にて嘸御待兼ねあそばし候事と存上候
父あちらへ参りて直ちに心當りを問合せ又人
にも頼み置き候ひし由なれども只今は田舎多
忙の折柄にて何分是はと思ふ者も見當らざり

し由に御座候併し一人連戻り申候年は十七歳にて初奉公に候へども家貧しき爲叔母の許に参り手傳など致し居りたるものにて多少の苦勞も致し雜事にも慣れ居り候ゆゑまんざらお間にあはぬ事もあるまじきかと存ぜられ候父のとまり居りし家が即ち其の叔母の家に候ひしよしに候當人家族は母の外兄弟妹各一人づつ有之田舎に育ちたる割合には幾らか行儀作法も心得居り氣立は極めて正直らしく氣のきくといふ方には御座なく候へども其の代りに

は人に馴れ過ぎて俗に申すすれからしなどいふところは少しも見えず候御物堅き御家には却ておよろしかるべきかと存じ試に御家の事話して見候處さる御家ならば是非上りて行儀裁縫など心得させて頂きたしと申出候もし御思召もあらせられ候はゞ何時にても引連れ御目見に参上いたすべく候取りあへず父に代りてあなた様まで申上候

かしこ

(芳賀矢一の文に據る)

*東京帝國大學文科大學教授、文學博士、國史家

二六 朝鮮の民情 萩野由之

余嘗て朝鮮を巡遊し、つらく、其の國の制度風俗を見て、韓國の衰亡は人民の無能なるにもあらず、土地の瘠确なるにもあらず、氣候の不調和なるにもあらず、全く上流社會の腐敗に因るを認識し、韓國を滅せるものは、其の國民にあらずして、彼の兩班なり。」と言ひき。

彼の國には王室の下に多數の兩班と云へる貴族あり。次に中人、次に常漢、即ち平民あり。其の下に賤民、即ち奴隸あり。されど、今はこの階級を撤去した

*普通に白丁といふ。

りと聞く。兩班は其の中にまた幾多の差等あり。彼の王室の如きも、實は兩班中の人たりしなり。然れば、兩班は華族の如くなれども、又、其の卑しき者は士族に類す。其の數は十萬とも十數萬とも稱すれども、確かならず。兩班の次の階級なる中人は宛も日本の士族の地位に立つ者にして、十萬乃至二十萬人ありと稱すれども、是亦確かならず。而して、此等兩班中人は、即ち官吏ともなるべき資格を有する階級なり。常漢、即ち、一般國民は、極めて温順勤勉なる人民と稱

すべく、其の體力もまた頗る強健にて、農民としても、
労働者としても、世界中稀に見る體格を有せり。而
して、韓國の實業は、從來、農工商の順序をなし、農は比
較的に貴ばれ、工は賤民同様に取扱はれ居たりしが
ため、工業は非常に衰へ、今日の朝鮮にては新羅・高麗
時代の工業は夢にも見ることを得ざる有様なり。
之を要するに、彼の國の近世史を滿せる黨同伐異の
紛争は、全く彼の兩班・中人の官吏社會に起れるもの
なり。即ち、李朝を建てたるも彼等の社會なれば、李
朝を滅したるも彼等の社會にして、一般の順良なる

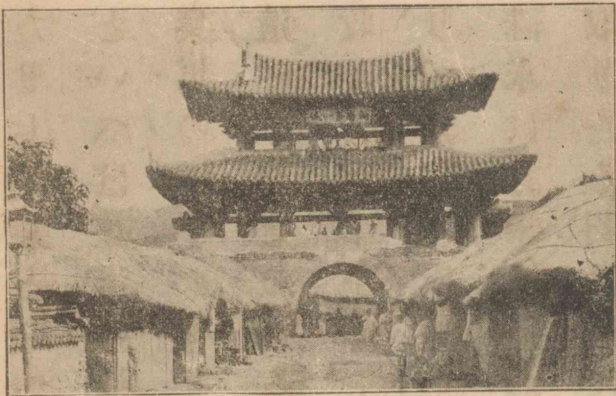
國民は之に與らざるなり。

上奢りて下窮す。濯々たる禿山、蕭條たる村落、見る
からに亡國の氣象を具へたる韓國は、實にあはれな
る國なりき。李朝*
(太祖李成桂(二二
五二)より隆
熙帝(二五七〇)
まで。五百餘年といはず、高麗朝の時代
より、兩班等は政權爭奪のために陰謀譎詐を事とし
て相鬭ぎ、其の比較的平穩なる時に當りては、己獨り
榮華に耽りて、民の痛苦は心にもかげず、資用足らず
といへば、民間に誅求して、百方收斂す。而して、兩班
の上には王室あり、上より上よりと壓迫して、濕薪を
束ぬるやうにすれば、村落も田畑も山野も皆荒蕪せ

*
(太祖李成桂(二二
五二)より隆
熙帝(二五七〇)
まで。

ざるを得ざるは當然の事のみ。然れば、足一度韓國に入れば、其の官衙と民屋と、兩班と下民との對照は、人をして其の懸隔の甚だしきに驚かしむ。官衙は堂々たる瓦屋の大厦なるに、下民は矮小なる茅屋、豚小屋の如きに羣蠅と共に蠢々乎として生活す。中には勤勉して些の貯蓄をなし、子孫の計をも爲さんとする者あるべけれど、財を生ずれば、則ち官は高きに居て之を凝視し、言を設けて誅求し、應ぜざれば、獄に投じ、笞杖を加ふ。又、技術に長ずるものあれば、彼等は種々の細工を命じて其の價を償はず、應ぜざれば

ば生命を失ふべし。



朝鮮の樓門と民家

此を以て、技に巧なる者は藏して顯さず。爲に、工藝技術は年々に退歩して、昔名高かりし陶器も漆器も、今は一種も見るに足るものなし。此の如くにして、國の亡びざらんことを求むとも、得べからず。彼の國民は眞に怒むべき人民なりしなり。「苛政虎よりも猛し」と。上奢り

政荒むがため、收斂・誅求至らざるなき情態は、次の例

に徴して最も明なり。十餘年間平安南道の觀察使たりし閔某といへるは大の誅求家なりき。觀察使といへば、該道の最高長官にして、行政司法は固より、兵馬の權をも有せるが、其の上に、彼は平壤離宮の營造監をも兼ねたるにより、威權薰灼當るべからず。收賄誅求手を盡したる上に、地方の兩班の資格を賣りて非常なる富を致し、人民の痛苦言語に絶したり。誅求に誅求を重ねて最早絞るべき民膏なしと見て取りたる閔は、遂に轉任して平安道を去りぬ。去るにのぞみて、同道の人民は、何思ひけん、熱心に留任運

動を起したり。是豈大不可思議の事にあらざるや。人民は曰く、吾等は最早貧窮骨に徹せり。長官いかに取らんとすとも、取るべきものはあらじ。長官も既に之を知ればこそ任を轉ぜんとはすなれ。若し新に觀察使の來るあらば、更にまた吾等に向ひて誅求を加へん。然らば、骨を削るに至らざれば、已まざるべし。寧ろ閔觀察使の在任を希望する所以なり。』と。其の言流石に意表に出で、日本人などの思ひも及ばざる所なり。嗚呼、韓國の人民は此の如くにして苦められ、官吏は此の如くにして榮耀を極めたり。

「一度觀察使となれば、三代坐食するを得」といへる韓諺あるにても、其の一斑は推すに難からず。觀察使の上には大臣あり、國王あり。又、其の下には郡守あり。幾層も下に向ひて壓力を加ふ。下民何ぞ堪へん。國の衰亡する、故なきにあらざるなり。然れども、朝鮮人は極めて勤勉順良なり。余が彼の地に遊ばんとする前、經驗ある人余に告げて曰く、韓人は譎詐多し。釜山に上陸せば、苦力を始めとして、命を用ひざる者は、口舌を費すを要せず、唯鞭撻あるのみ」と。余は、彼も亦人の子なるに、（或の曰やあれまんの子持物）と思ひつゝ、行き

て應接もして見、使役もして見たるに、柔順忠實、遂に一言の叱咤をだに要せざりき。況や鞭撻をや。地方に旅行して、田畑耕作の様をも村落の生活をも見たるに、北韓に近き平原も、到る處皆開けて、耜鋤の入らざる所なく、人家も見えざるに、何處より來りて耕すらん」と問へば、皆二里三里の遠方より來るといへり。江東郡には近年農業試作場を設けて農事改良の模範と爲す。一韓人私語して、あれほどの狭き耕地に人を多くかけ、金を多くかけて作らば、吾等とても善く作らんこと難からず。吾等は人手なく、少人

數にて廣き田畑を耕す上に、肥料を施すこと能はざる故、かくは收穫の少なきのみ」といへりとぞ。亦一理なきにあらず。

日本人は朝鮮人が鐵道沿線に長煙管を携へつゝ、汽車を珍しげに見送る悠長なる態度を見て、皆惰民なりと思へるやうなれども、かゝる事は日本人にも尙あるなり。朝鮮人は必ずしも惰民ならじ。浸水地の苗種の如く、汚水のために壓迫せられて生氣を失ひたれども、一旦天霽れ暑さ強くならば、必ず生氣を回復して、新萌芽を發せん。多年官吏の暴政に壓迫

せられ、斯くの如きに至れる彼の國人も、一たび太陽の恩光に照されなば、一段の生氣を發すべきは亦必然の勢なり。

されば、時局の發展して韓國の併合となりたるは、同國に於ける一大革命にして、又、一大生命なり。同國政府の廢亡よりいはゞ、韓人として痛歎もすべきなれども、それは前にいへる兩班以下の參政資格ある種族の慶弔にして、同國の基礎たるべき人民に於ては、寧ろ之に頼りて數百千年の蒙を啓くを得、枉屈を伸ぶるを得て、此に新生面を開くべき時節に到來せ

るなり。「虎より猛し」といふ苛政の虎口を通れ來て、
 今や仁慈なる母の懷に入りしなり。然らば、兩班者
 流のためには或は悲しむべし、國民のためには大に
 慶すべき事なり。朝鮮國民の蘇生はこれより來ら
 ん。
 (歴史地理)

◎ 碁盤の散歩

坪井正五郎

○ 碁盤の散歩

温泉宿の泊客、訪問者と碁を打たうとして碁盤を探して
 ゐる所へ、女中が來たので、「オイ〜」と呼び掛けて、

東京帝國大學
 理學部教授、
 大正二年、
 都に於て歿す。

碁盤はどうした。

と聞くと、女中

五番さんは、先程どちらへかお出ましになりました。

○ ステ、膏

久しく歐羅巴の某地に住んでをられた某貴族の夫人、歸
 朝に際して、手廻の物のしわけをなし、此は送ることにし
 ようとか、此は要らないとか、一々從者に指圖をしてをら
 れた中、即効紙のブリキ筒を手にして、

これは捨て、行かう。

といひながら從者に渡されたところ、從者は夫を膏藥の
 名と心得て、筒に貼り紙をして、

「ステ、膏」

と書いた。東京着の上、荷物を開いて見ると、此の筒が出た。夫人は始めてこの間違を知つて、笑ひを漏されたが、あればあるで重寶な物故、そのまゝ取つて置かれた。或時、何か即効紙の必要があつた時に、夫人これ、誰ぞあのステ、膏を持つてお出で。

○雀のお化

或婦人が毛筆で雀を寫してゐると、側に手をついて觀てみた下女が、
「どうも、雀が好く出來ました。」
といふ。婦人笑ひながら、

「ナアニ、雀だか、何だか、分らないものが出來たのさ。これは雀のお化ばだよ。」

といふと、下女

「アラママ、さやうで御座いましたか。ほんとに奥様は雀のお化がお上手でいらつしやいますこと。」

○御蔭で皆丈夫

戸籍調の巡查が帳面を見ながら、

「どうです、こなたではお變りはありませんか。といふと、婆さんが出て來て、

「へい、ありがたう御座います。御蔭様で皆丈夫で御座います。」
(牛のよだれ)

二七 鶯宿梅

藤岡作太郎

さゝねど人も尋ね來ず、
藁屋わびしくおちぶれて、

歌に名だかき貫之（三）の

娘（三）といふもはづかしや。

金も寶もなき家に

似あはぬものといはれても、

これぞ此の世の慰めと、

軒端をかざる梅の花。

鶯こそは日々の友。

起出づる吾を待ち顔に、

翼もかろく香をちらし、

朝日の歌をうたひつゝ。

里のおとづれ、いかにして

雲の上まで聞えけん、

紅梅召すと御使（三）の

（三）紀貫之、平安朝
の代（三）の歌人
紀の内侍、この
事より紅梅の内
侍とも稱せらる

*
一條天皇の勅使

くだるは花の譽なり。

されど、とゞまるわが身こそ

心さびしきわかれかな。

せん方なさに歌一首、

枝にむすびてたてまつる。

勅なればいともかしこし。鶯の

宿はと問はゞ、いかゞ答へん。

二八 根分の後の母子草その一

瀧澤 馬琴

名は解、曲亭馬琴と稱す。徳川末期の小説家。嘉永元年歿す。東京市麹町區に在り。九段坂に並びたる坂なり。馬琴に當時此の坂に住みたり。

文政四年辛巳の春二月晦日の黄昏ごろ、飯田町の中坂に行倒れたる老女ありとて、これを觀るもの堵のごとし。この日、自身番屋に集ひ居たる當番の町役人等、定番人を遣して、その體たらくを見せけるに、旅行くものと覺しくて、むげに老いさらぼひたるが、長途に疲れ、足痛みて、一步も運ばしがたし。といふなり。これによりて、町抱への者に脊負はせて、やがて番屋に扶け入れて、事のやうを尋ぬれば、答へて曰く、ば

*磐城國西白河郡
白河町

は奥州白河^{*}の城下、中の町なる宮大工十藏が後家にして、名をしげと呼ぶるゝもの、今年は七十一歳になりぬ。夫十藏が世を去つてのち、十三箇年以前、文化六年の春、わが子源藏といふ者逐電して、行方も知らせず。人づてに聞けば、江戸に在りといふ。いかてわが子の在所を尋ねて逢はばやと思ひ定めしは、九箇年以前の事なりき。

かくて、文化十年の春の頃、陸奥よりあくがれ來て、江戸に留ること半年ばかり、四里四方の外、近郷まで月毎日毎に尋ねしかども、夢にだに逢ふよしなかりき。

さては江戸にはあらざるならんと、やうやくにおもひかへして、愈、廻國の志念を堅うし、東山、西國、いへばさらなり、南海、北陸、おちもなく、凡そ六十六箇國の靈山、靈地を巡禮して、過去には亡き人の菩提の爲、現在には命のうち、わが子にめぐり逢はしめたまへ。」と念ずる外に、業もなし。乞食して行く旅なれば、人の情に遇ふ日は稀にて、露に宿り風に梳り、或時は、荒磯の浪風に吹きすさまれて、終夜夢も結ばず、又、或時は、深山路の雪に降閉ぢられて、つく竹杖の節も届かず、さまざまの艱苦を歴たれど、これまでは一度もやみ

*武藏國橋樹郡高津村、多摩川の波なり

煩ひしことなく、旅寐すること九年に及べり。今は既に巡り盡して、廻國すべき方もなければ、再び江戸を志して、木曾路を下り、甲斐が嶺をうちめぐり、よんべは二子の渡とかいふ川邊のあなたなる里に宿りつ。さて、今日、江戸に來つるなり。かゝりし程に、あの御坂の邊にて俄かに足の痛み出でて、一步も運ばし難ければ、思はずも倒れ侍りき」といふ。町役人等由を聞きて、「心地は如何に」と尋ぬるに、「足の痛めるのみにして、心地は常に變らず」と答ふ。「江戸に知る人ありや」と問へば、「否、知る人としては侍らねど、

(一) 東京市京橋區にあり
(二) 松平定信

八丁堀なる松平越中守様は國屋敷にておはしますなり。かしこへ送らせ給へ」といふ。これより前、その腰に附けたりし風呂敷包を解かせて見るに、九箇年以前、故郷を立ちいづる時、十藏しげ等が菩提所なる何某寺より書いて與へし通り手形といふ證文一通あり。濕風塵埃に汚れけん、紙は茶をもて染めたるごとくいと古びたりけれども、その印章は疑ふべくもあらず。この他は、錢八百文と布のぼろとのみなりけり。そのいふよしと寺手形とすでに吻合するをもて、番屋の奥の間に臥さしめて、藥を與へ、且、夕

餉をたうべさ、せなどす。

二九 根分の後の母子草その二

瀧澤 馬琴

さる程に、日は暮れて、酉の初刻も過ぎたる頃、武家の中間とおぼしき男、自身番屋におとなひて、やがれ、さきに主用の使にたちて、こゝの中坂をよぎりしとき、行倒れたる老女を見たり。心に懸るよしもあれば、つばらに問はまほしかりしかど、火急の使なるをもて、時の後れんことの口惜しくて、思ひながらに打

過ぎたり。今、その歸るさなるにより、中坂にて人に問ひしに、番屋に扶け入れられて、こゝにありとぞいはれたる。その老女を見せ給へ」といふ。この時、しげはまどろみたるを、町役人ら呼びさまして、「そなたの由縁の人にやあらん、見まほしとて、只今來たり。對面せよ」といふ程に、しげは忽ち起直りて、「そはわが子源藏ならずや。やよ、そなたは源藏か。源藏にあらずや」とせはしく問ひつゝ、這ひよるを、町役人ら推しとめて、「そのみせきては事も分らず。心を鎮めて問へ」といふ。その時、くだんの中間は燈

火をさしむけて、とぎまかうぎまうち見つゝ、わが母に似たれども、年あまた経しことなるに、いたく老衰したるをもて、定かにはいひがたし」といふ。
町役人らこれを聞きて、「然りとも、かれ自ら奥州白河仲の町、宮大工十歳^蔵が後家、名はしげと告げたりし事の由の分明なるに、をさなき時に別れても、親の名までを忘れはせじ。忘れやしつる」と詰る。「さん候。その名に違ひはなけれども、世には又同名異人のなきにしも候はず、又、偽りて利を謀る者もなしとすべからず。身につけたりしそが中に、證據となるべき

物などの候はずや」と問ふ。町役人ら諾ひつゝ、かの手形を開きて見すれば、見つゝ、小膝をはたと打つて、わろくも疑ひつるものかな。わが母に相違候はず」といふを、しげは聞きあへず、然らば、そなたは源藏か。「源藏にこそ候なれ」と名のれば、しげは這ひまつはりて、抱きつきつゝ、涙ぐみ、やよ、源藏よ。われに逢ひたいくと思ふばかりに、九箇年このかた、日本國中うちめぐり、いくそばくの艱難苦勞も、願かなうて、うつせみの息の内なる今宵いま、逢ひみることによるこばしさよ。やよ、源藏よ、顔を見せよ。そなたはをさ

なかりしとき、左の眼ぶちに腫物出できしその折に、
 眼の中へ針二本まで打たせしことあり。その針の
 痕今もあらん。こちらを向いて見せずや」と口説き
 たてつゝ、また抱きしめて、涙は雨と降りそゞぐ、その
 歡はなか／＼に譬ふるに物なかるべし。天地を拜
 み、町役人らを一人／＼に伏拜む慈母の哀歡無量の
 恩愛、今さら膽に銘じけん、源藏もはふり落つる涙を
 袖にせきかぬれば、人皆泣かぬはなかりけり。「此の
 時のしげが有様は、和漢巨筆の稗官なりとも、寫しと
 らんこと易かるべからず、又、俳優の上手なるも、よく

まねん事難かるべし」と、後にぞ人の評しける。

(兎園小説)

三〇 すみれ

園三 女

鼻紙の間にしほむ董かな。

す三 て 女

雪の朝、二の字二の字の下駄のあと。

千三 代 女

朝顔に釣瓶とられて、もらひ水。

三 加賀松任の人。
安永四年歿す。

三 丹波の人、姓は
田。元祿十一年
歿す。

二 伊勢松阪の人、
姓は度會。享保
十一年歿す。

近江(二)の人。

朝顔の咲くや、親にも叱られず。

智(三) 月

古川(三)氏の女、文政十三年歿す。

花(三) 讚

子を寝せた間を抜けいでて、涼かな。

文學者(三)。

三一 奉天の會戰その一

新保(三) 磐次

露國滿洲軍總司令官(四)。

世界有數の智將といはれたるクロパトキン大將の世界最強の露兵を提げてさしも肝膽を碎きたりし遼陽守禦の計畫も一朝に破られ、沙河にも足を止め得ずして奉天まで引退きぬ。かくても猶クロパト

キンは「豫定の退却を結了せり」と公報し、歐洲人も之に附和して退却の巧妙を嘆賞するものあるこそ遺憾なれ。

「よし、さらば、今度の戦には敵の足をな立てさせそ、一騎も残さず討取れ」と宏量大度山の如き我が滿洲軍總司令官大山元帥は、機鋒銳利、智畧縦横の聞え高き總參謀長兒玉大將を初として、單騎旅行に名を轟かし外邦の軍事に精通せる福島少將、敏腕にして學術に富める井口少將、深沈にして戰略に達せる松川少將等の諸參謀と謀議を凝し、天を蓋ひ地を包む大膽

大山(二) 巖

兒玉(三) 源太郎

福島(三) 安正

井口(四) 省吾
松川(五) 敏胤

野津 道貫

黒木 爲楨

川村 景明

奥 保 翠

乃木 希典

立見 尙文
大迫 尙敏
大島 義昌
大島 久直

周密なる部署をぞ定めける。

中央軍は大將中の故參たる野津大將之を指揮し、右翼軍は今度眞先に渡海せる黒木大將、最右翼軍は鴨綠江方面より轉ぜる川村大將之を率ゐたり。また、左翼軍には南山・得利寺の激戦に名高き奥大將、最左翼軍には世界無雙の堅城たる旅順の要塞を陥落せしめたる乃木大將これが司令官たり。相従ふ人々は、立見中將、大迫中將、兩大島中將を始として、或は西南戦役に或は日清戦役等に百戦の功を積みたる勇將にして、將校より下士卒に至るまで、皆命を鴻毛の

輕きに比し、義を泰山の重きに比して、一度も敵に背を見せたることなき健兒なり。

奉天は滿洲の首都なり、晴の勝負を決すべき地なり。クロバトキンもいつまでか退却の術を誇るべき、西伯利亞鐵道の有らん限りの力を盡して歐露の精兵をよび下し、用意をさく／＼怠なし。

第一軍司令官は軍人間に最も人望ありて「おやぢ」と綽名されたるリネウイッチ大將、第二軍はカウルバルス大將、第三軍はビルデルリング大將にして、全軍四十有餘萬、我が軍に比して慥かに優勢なりと聞えた

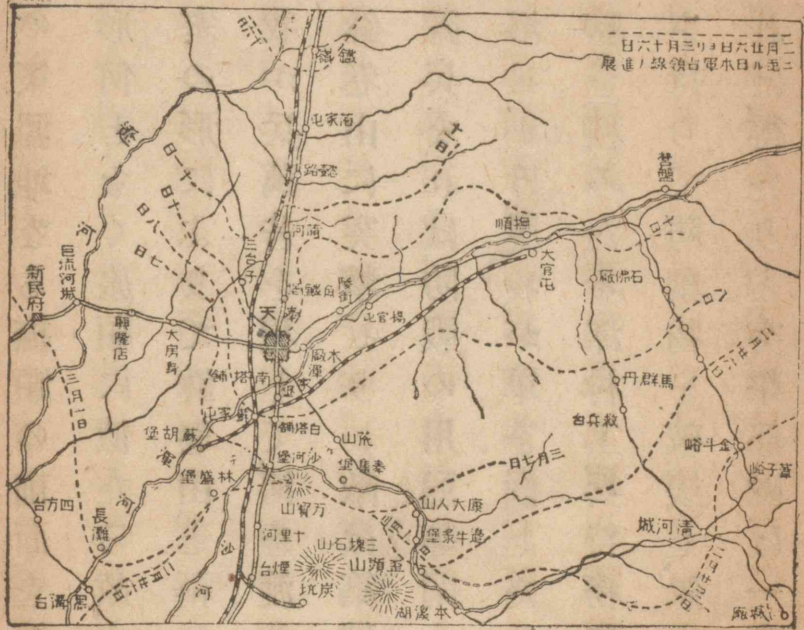
*
明治三十八年

り。
斯くして、敵身方の全軍合せて八十五萬人、大砲二千五百門、西は遼河より東は興京に至るまで、山を褻み、河を横ぎり、戦線四十里に互る。誠に有史以來の大戦なれば、全世界の視線は皆こゝに集注せり。
時は二月の末つかた、滿洲内地のことなれば、朔雪續紛として山河を埋め、烈風肌を刺し、指を墮さんとすれど、我が軍は戦機已に熟しぬとて、左右翼より大活動を起したり。其の手始は最右翼なる川村軍の清河城攻撃なり。そもく、清河城といふは敵の左翼

の策源地なる撫順の前面を擁護する要害にして、地形何となく旅順に似たる故、之を小旅順と呼び、又、要塞の形によりて鉢卷山と稱へたり。二月二十三日、我が兵萬苦を犯して、河を渡り山を越え、無二無三に鉢卷山に突撃せり。敵は築城防禦には世界無雙の露兵なれば、防戦の用意等閑ならず、機關砲を雨霰と浴せかけ、屢、我が軍を悩したれど、旅順の要塞戦に經驗を積みたる澤村工兵特務曹長等、手にく、爆裂薬を持ちて防禦物を破壊し、忽ち一條の通路を開きければ、得たりと、突撃部隊は一齊に亂入して、驚き躁く

明治三十八年二月

第二軍



敵兵を縦横無盡に突立て斬立て、廿四日全く此の地を占領し、直ちに追撃に移りて、撫順方面を壓迫せり。清河城の占領と同時に、右翼即ち黒木軍は前進を始め、破竹の勢を以て各地を占領し、最右翼軍と聯絡を通

じて益、撫順方面を壓迫し、大に高臺嶺に激戦せり。

三二 奉天の會戰その二

新保 磐次

クロパトキンは我が軍の撫順方面に力を用ふるを見て、さては此の頃旅順を攻落して勝誇りたる乃木軍は、必定此の方面に向ひつらんと、急ぎ總豫備隊并に渾河左岸の兵を其の左翼に移し、飽くまで東面を防ぎ止めて、奉天鐵嶺間の軍用路を保護せんと決心せり。

誰か料らん、乃木軍は最左翼として今や奉天の西面

第三軍

に向つて迂回運動を起しつゝあらんとは。忠勇慈愛なる乃木大將は敢へて旅順の大功に誇ることなく、彼の攻圍戰に莫大の兵士を損ぜしを遺憾とし、死を以て罪を償はんと、一たび馬首を北に回すや、遼河と渾河との間なる敵軍を片端より蹴散らし、疾風の如くに進軍せり。

第四軍

是より先、中央なる野津軍も、乃木軍と殆ど同時に活動を始め、萬寶山の堅壘を猛烈に射撃して敵に迫り、左翼の奧軍は野津乃木兩軍の間に在りて、善く兩軍の勢を助け、李官堡揚士屯の如き要害を攻撃して、萬

第二軍

寶山と共に苦戦しつゝ、乃木軍の迂回運動を容易にせり。

三月四日、乃木軍は突如として奉天の西四里許なる後民屯に現れたり。クロパトキンの驚、一方ならず、急に其の左翼及び中央軍の一部を奉天附近に集中せしめ、こゝを専途と防戦したれども、時已に遅し。猛勇なる乃木軍は直ちに鐵道を破壊して、敵の退路を絶ち、其の背面より巨砲を連發せり。此の時、クロパトキン本國に打電して「余は包圍せられたり」といへり。今はこれまでとや思ひけん、何ぞそれ語勢の

悲しきや。

さる程に、最右翼軍は次第に前面の敵を追撃して、三月八日に馬群丹を占領し、九日、遂に撫順を占領せり。右翼黒木軍も各地の敵を撃拂つて、守備を川村軍に譲り、直ちに鐵嶺街道に猛進して、敵の退路を遮らんとす。其の行軍電光石火の如く、鬼神も測り知るべからず。かくして、包圍益嚴し。

十日には、中央軍の大久保縦隊すでに奉天城の南門に突貫し、其の他の諸隊も各門に迫り、敵味方の砲聲天地を震動し、壘壁覆り、土囊飛散し、黒烟濛々として

(三) 鴨綠江軍
(最右翼軍)

(三) 第四軍
大久保利貞

(三) 第二軍
(三) 第三軍
(三) 騎兵獨立旅團長

咫尺を辨ぜず。かゝる處に、左翼軍と最左翼軍との間より遶り出でたる秋山少將の騎兵團は、宵よりの苦戦に少しも屈せず、遂に西門を乗取つて、朝日と共に日章旗を揚げ、萬歳の聲は更に天地を震動せり。クロバトキンは辛くも、流星光底の一撃を遁れて、いつの間にか退却せり。大將を失へる將校士卒せんすべを知らず、或は白旗を立て、軍門に降り、或は黒烟をくゞりて鐵嶺の方へ落行く。待構へたる黒木軍退路を遮斷して頭上より巨砲をあびせ懸くれば、乃木軍は側面より猛烈なる射撃を與へつゝ、北方に

急進せり。

大山巖*

こゝに於て、總司令官は全軍總追撃を命じ、恰も海嘯の山を包んで岡に登るが如く、澎湃として押寄せれば、吶喊の聲天地を動し、山河草木皆日本兵なり。亂れ立ちたる露西亞兵は膽落ち心寒く、途方を失ひて捕虜となる者數を知らず。辛うじて落延びたる者も、息をも繼がせず追立てられて、奉天以北の要害と頼みし鐵嶺にも足を立て得ず、散々に潰亂せり。黒木軍は進んで鐵嶺を取り、乃木軍は更に進んで開原・昌圖を取り、川村軍は轉じて興京を占領し、奉天の

大會戰こゝに終りぬ。

*二月下旬より三月中旬に至る。

此の役、戰鬪を續くること半月、敵軍の失ふ所兵二十萬、砲五百門なり。戰鬪半月、損失全軍の半に至るは、皆古來戰史に曾て有らざる所なり。されば、此の戰は有史以來の最大戰、最長戰、最激戰といふ可し。其の間、飢ゑて食を得ず、疲れて眠るを得ず、身を敵彈に委し、骨を砂礫に暴して悔いず。軍人の勞苦洵に想像の及ぶ所にあらず。然りと雖も、之を以て平和の機を早め、之を以て露國改新の運を促すを得たり。奉天會戰の功亦偉大ならずや。

大正八年二月二十日
 教育部
 高等女子學校國語教科書
 檢定

行發	初版	日	三	月	一	年	五	十	三	治	明
行發	再版	日	六	月	三	年	五	十	三	治	明
行發	三版	日	七	月	十	年	六	十	三	治	明
行發	四版	日	九	月	二	年	七	十	三	治	明
行發	五版	日	八	月	十	年	九	十	三	治	明
行發	六版	日	七	月	二	年	十	四	四	治	明
行發	七版	日	十	月	八	年	十	四	四	治	明
行發	八版	日	三	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	九版	日	一	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	十版	日	二	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	十一版	日	三	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	十二版	日	四	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	十三版	日	五	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	十四版	日	六	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	十五版	日	七	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	十六版	日	八	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	十七版	日	九	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	十八版	日	十	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	十九版	日	十一	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	二十版	日	十二	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	二十一版	日	十三	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	二十二版	日	十四	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	二十三版	日	十五	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	二十四版	日	十六	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	二十五版	日	十七	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	二十六版	日	十八	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	二十七版	日	十九	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	二十八版	日	二十	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	二十九版	日	二十一	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	三十版	日	二十二	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	三十一版	日	二十三	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	三十二版	日	二十四	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	三十三版	日	二十五	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	三十四版	日	二十六	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	三十五版	日	二十七	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	三十六版	日	二十八	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	三十七版	日	二十九	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	三十八版	日	三十	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	三十九版	日	三十一	月	十	年	十	四	四	治	明
行發	四十版	日	三十二	月	十	年	十	四	四	治	明

四訂
 女子國語讀本 全十册

大正八年
 定價
 卷一、二、三、四、九、十
 各金五拾九錢
 卷五、六、七、八
 各金四拾貳錢



定價
 卷一、二、三、四、九、十
 各金參拾六錢
 卷五、六、七、八
 各金參拾錢

發賣所
 賣捌所

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

金港堂書籍株式會社
 各府縣特約販賣所

印刷所	代表者	發行者兼印刷者	同	同	同	著作者
東京市芝區愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社	原亮一郎	東京市日本橋區本町三丁目十七番地 金港堂書籍株式會社	岡田正美	篠田利英	小島政吉	吉田彌平

四訂女子國語讀本卷四終

四訂女子國語讀本卷四

第...年...組
...
...
...